

Historical Library of Shinji Town

# 宍道町歴史叢書8

2003年3月

- 宍道町内出土鉄滓について ..... 石井 悠 (1)  
附 古代たたら復元教室 .....  
宍道町宍道地内の古代山陰道遺構について ..... 池橋 達雄 (27)  
地名配置から見た佐々布川河口部の居館と山城 ..... 山根 正明 (35)  
宍道町岩屋寺の石造物 ..... 間野 大丞 (41)  
雲松寺山（猪道山）城発掘調査報告 ..... 宍道町教育委員会 (45)  
山神谷溜池—木幡山荘隧道について ..... 宍道町教育委員会 (58)

島根県宍道町教育委員会



# 穴道町内出土の鉄滓について

石井 悠

## はじめに

穴道町の雲松寺（猪道）山城跡南支郭群の発掘調査（平成14年8月20日～12月26日）で、トレンチ内から鉄滓が出土したとの連絡を受け、実見の機会を得たので、以下この紹介にあわせて穴道町内出土の鉄滓についても述べることにする。

## 鉄滓の種類

製鉄や鍛冶を行なうときに排出される滓は、スラグ、鉱滓、製錬滓、精錬滓、鉄滓、鉄渣、のろ、からみ、かなくそ等と呼ばれ、一般に統一された表現とはなっていない。<sup>註1</sup>

しかし、最近の遺跡発掘調査報告書等では、鉄滓という表現が主流となっているので、本稿でも鉄滓を用いることにする。鉄滓には、①鉄鉱石や②砂鉄のような鉄源を製錬した場合のもの、③出来た銑鉄や還元鉄を加熱して半成品の鐵板や鉄棒を造る精錬鍛造の過程で生じたもの、④刀剣や農工具などを鍛造成形する過程で生じたもの、⑤鑄物工房で銑鉄の溶解に伴って生じたものに分けられている。<sup>註2</sup> 以上の①～④を別の表現で分類すると次のようになる。<sup>註3</sup>

製錬滓………鉄鉱石あるいは砂鉄による製鉄の際に生じる

## 鍛冶滓

精錬鍛冶滓…鉄や銑を鉄滓の溶融温度以上（約1300℃以上）に加熱し、鍛錬と同時に含有する鉄滓を絞り出す工程（大鍛冶）で生じる

鍛錬鍛冶滓…大鍛冶で得られた左下鉄や包丁鉄から製品を鍛造する工程で生じる

さらに細かくみれば、鉄滓の生成やできた位置とか形状その他の要因によって、流出滓・流动滓・炉内滓・炉底滓・椀形滓・粒状滓・含鉄滓などと呼ばれている。

本稿では、主として筆者の肉眼観察によっているので、分析結果で明らかにされたものや報告書に記載されているものを除き、製錬滓（流出滓・炉内滓）と鍛冶滓以外の表現は用いていない。

## 雲松寺（猪道）山城跡南支群出土鉄関係遺物

各トレンチから土師器片、須恵器片、陶磁器片、土師質土器片に混じて鉄滓、鉄器、鉄片、炉壁片？が出土している。鉄器、鉄片については、銹化が進み、ものの形状の不明なものもある。遺物の出土状況から、丘陵頂部あるいは斜面からの流入物と考えられる。当該丘陵は、雲松寺（猪道）山と呼ばれ郭を配した中世の城跡である。従って、各トレンチから出土する遺物には中世から近世初頭にかけてのものが含まれている。

鉄滓及び炉壁片？の詳細については、表1のとおりである。いずれも小破片である。前述のとおり、科学的な分析を経ていないが、鍛冶滓と推定している。郭の中に鍛冶炉が存在したものと考えられる。

## 穴道町内出土の鉄滓

以下、町内で出土した鉄滓やたら製鉄とか鉄器生産について、若干の考察を加えることとする。

### ＜鉄滓散布地＞

今はもう消滅したがかつて散布していたという所を含めて、15ヶ所の散布地（発掘調査による遺

表1 鉄闇保出土遺物の観察表

遺物番号	土 層	種類	外 見 所 見	着色力	量(g)
1トレンチ No.4		鐵治津	最大長さ約60mm、最大幅約40mm、最大厚さ約17mm 表面凹凸状を呈し、大小の気泡が多い。全体に黒味がかかっている。 光沢なし。	無	50
2トレンチ No.3	黒色土層 樹上土	鐵治津	長さ約57mm、幅約46mm、厚さ約24mm 表面凹凸状を呈し、大小の気泡がある。やや黒味がかかっている。光沢なし。	弱	85
2トレンチ No.4	混合土層 黒色土層直上	鐵治津	最大長さ約54mm、最大幅約39mm、最大厚さ約21mm 表面凹凸状を呈し、大小の気泡があるが硬い。全体に赤みがかかっているが、部分的に黒味をおびている。光沢なし。	有	70
2トレンチ No.13の内1 破片	黒色土層	鐵治津	最大長さ約29mm、幅約22mm、厚さ約16mm 表面凹凸状を呈し、小の気泡が多い。軽い感じがする。表面茶色を呈すが、断面はやや青みがかかっている。光沢なし。	無	10
3トレンチ No.1	包含層	鐵治津	最大長さ約42mm、最大幅約30mm、最大厚さ約8mm 表面凹凸状を呈す。緻密である。全体に黒い。光沢なし。	有	20
2トレンチ No.12	黒色土層	炉盤片?	最大長さ約40mm、最大幅約37mm、最大厚さ約24mm 表面は、小気泡に覆われている。破断面には、気泡がなく緻密である。表面は、被熱のため赤変している。破断面は、青みがかった黒色を呈する。 胎土に砂粒をほとんど含まない。	-	50

表2 穴道町内の鉄津出土地一覧

番号	遺跡名	所在地	遺構の種類	遺構の立地	鉄津の種類	他の出土遺物	時代	備考	註
1	大堀遺跡	上來待 大森	不明	丘陵部に広がる鋸削面	鐵治津	須恵器片、土器部片	東寺神社参道脇の丘陵地 に鐵治津が存在するか		19
2	金子山遺跡	上來待 大森	たら跡	低丘陵中腹	製鐵津(流出津・炉内津)		中世～近世 初頭か	丘陵斜面をし字状にカットした平坦面がある	19
3	大野伊跡	西来待 大野 敷布地(たたら跡)		低丘陵斜面(採土場) 中腹か	製鐵津(流出津・炉内津)		中世～近世 初頭か	斜面(土跡)の上面に平坦面がある	19
4	筑堤遺跡	上來待 小林	敷布地(たたら跡)	丘陵斜面付近の 斜面	製鐵津(流出津・炉内津)		中世～近世 初頭か	かつて堀田、現在の牛舎周辺	20
5	坂上遺跡	上來待 小林	敷布地(たたら跡)	丘陵斜面付近の 斜面	製鐵津(流出津)		中世～近世 初頭か	水江正兵車庫用鐵造成のため、斜面を切り崩したとき、鉄津出土という。現在、道路脇の斜面に製鐵津の散在が見られる	20
6	占堀遺跡	上來待 小林	敷布地(たたら跡)	丘陵斜面付近の 斜面	製鐵津か		中世～近世 初頭か	現在道路となっている	20
7	遠所越え遺跡	上來待 遠所		丘陵斜面を少しちゃった斜面	製鐵津(流出津・炉内津)		中世～近世 初頭か	丘陵斜面より少し下った標高約340mの位置に斜面をし字状にカットした平坦面がある	19
8	半田遺跡	上來待 舊原	敷布地(たたら跡)	丘陵斜面の斜面	製鐵津(流出津)		中世～近世 初頭か	周辺路面上に小鉄津散在。敷布地の南側丘陵斜面付近に平坦面がある	21
9	上來待カナク ソ谷鉄跡	上來待 舊原	敷布地(たたら跡)	丘陵斜面の斜面	製鐵津		中世～近世 初頭か	水路中で採取 水路上流の丘陵斜面にたたら跡の存在が確認された	19
10	湯ノ原遺跡	白石 湯ノ原	敷布地(たたら跡)	背後の高台(宅地) 及び製鐵津 か	製鐵津(流出津・炉内津)		中世～近世 初頭か	分水田を中心とした範囲に散在	
11	萩蓮跡	白石 下白石	不明	鋸削面	不明	土器部片		筆者確認できず	22
12	白石大谷工遺跡	白石 下金	I区段状遺構 地	低丘陵部	純形鐵治津、 合款鐵治津	鉄器	古代以降 横口式觀音窓も検出されている		13
13	葛長寺山(猪道 山)城跡	宍道 上野原	包含層	低丘陵上か	鐵治津	須恵器片、土器部片、土器 質土器片、鉄器片	中世～近世 初頭か	トレンチの東側直下奥に鐵治炉跡が存在するか	
14	堤平遺跡	白石 堤平	寺院跡	丘陵斜面を造成	鐵治津(焼形 津)	灯明皿、壺、 鉄錐形土器、 鉄瓶容器片、 鉄器、羽口、 鉢津(炉津)	奈良～平安		12
15	上野日遺跡	佐々木 上野	加工段1覆土	丘陵上	鐵治津(焼形 津)		古墳時代 又は古代	砂鉄を原料とする	7
16	北ノ廻遺跡	佐々木 小佐	不明	鋸削面	不明	須恵器片		筆者確認できず	22
17	萩田遺跡	佐々木 萩田	4号住居跡	低丘陵斜面	鐵治津(焼形 津)	鉄錐、磁石、 鉄劍	古墳時代 後期～平 安時代初期のいすれかの時	5号住居跡から、ふいごの 羽口も出土している 5・6号住居跡には炉跡 がある	11

表中の番号は、分布図の番号と一致する

構出土の例も含む)を確認している。個々の散布地の概要については、表2に示しておく。大正年間から戦時にかけて、鉄滓を集めて売るという商売が成立していたというので、鉄滓の量は多く、散布地も多かったと思われる。しかし、今となつては、知る人も少なくなってきた。可能な限り多くの散布地を把握して、この地における鉄生産の歴史を明らかにしたいと思う。

15ヶ所のうち、9ヶ所がたたら製鉄による製錬滓で、6ヶ所が鍛冶滓と考えられる。地質学的にみて、宍道町の南約4割の範囲は、砂鉄を含む花崗岩質地帯といふ。<sup>24</sup> これまで発見されている製錬滓は、大野鰐跡の1例を除きこの花崗岩地帯からである。一方鍛冶滓の散布地あるいは鍛冶滓を出土した遺跡は、花崗岩地帯からはずれている。今後調査が進めば、町内全域での両鉄滓の発見も考えられるが、たたら製鉄は、花崗岩地帯を遠く外れては成立しにくかったのであろうか。かつて言われた「<sup>25</sup> 鋼鐵七里に炭三里」という言葉は、本格的な高殿たら経営の成否を示したものと思われる。宍道町内のたたら製鉄は小規模なものであり、後述するように、せいぜい近世初頭までのことをと考えられる。従って、この言葉をそのままあてはめるわけにはいかないが、花崗岩地帯の北端から宍道湖岸まで2~3.5kmといったところであるから、町内全域でたたら製鉄が行なわれたとしても問題はない。

#### <製錬滓一たたら製鉄>

たたらといえばこの地域では奥出雲が著名で、宍道湖岸に近い部分でたたらが行なわれていたなどという人は稀である。しかし、前述のように地域に住む人々は知っていたし、現地踏査をしてみれば、たたら場の痕跡をみることができる。筆者はたまたま宍道町に3年間勤務したので、この事実を町教育委員会の稻田氏から教えられて知り、

調べてみようという気持ちになったのである。大東町より北側の内陸部は、奥出雲の続として何となくたたら製鉄地帯と認識していたし、同じ宍道湖岸に位置する隣の玉湯町でもたたら遺構が発掘されていることを知っていたのに、「宍道町でも」という驚きが本音であった。

製錬滓の散布地、即ちたたら関連の遺跡を町内でまだ9ヶ所しか確認していないが、他にも多くの遺跡が存在すると確信している。この地では、たたら最盛期の高殿たらが存在しなかったので、近世中期以降のいわゆる「野だら」が営まれたことの可能性を全く否定することはできないが、それぞれの遺跡を調べてみると、その立地や形態等から古い様相を示す遺跡が多いのではないかという考えをもつようになった。

これまで宍道町内で発掘された例がないので、安易に時代を決定することはできないが、次に掲げる理由から、町内で営まれたたらは近世初頭までのもので近世中期以降には既にたたら製鉄は行なわれなくなったとみている。

(1) 大東町との境をなしている脊梁山脈からやや下がった標高約340mの位置で、遠所越え遺跡が発見されている。この遺跡では、斜面をL字形に削平した位置でたたら操業を行ったと推定できる。また、低丘陵裾部に位置する遺跡でも、同様に斜面をL字形に削平して炉を築いたと考えている。このような手法は、6世紀後半頃の操業と推定される今佐屋山I区(邑智郡瑞穂町)や羽森第3遺跡(飯石郡掛合町)の例に通じる。

島根県内で発掘されたたら遺構をみると、古代から中世にかけての多くは、斜面をL字形に削平した位置に炉を築いている。斜面をL字形に削平して炉を築くのは、さらに時代が下ったとしても、せいぜい近世初頭までである。

町内発見の製錬滓散布地は、いずれも丘陵斜面や直下にあたり、上から流れ落ちた鉄滓と推

定されるのが特徴的である。

(2) 下倉の白石大谷 I 遺跡で、調査者は必ずしも肯定していないが、古代たらに供したと一般にいわれている横口付製炭窯（7～8世紀）が発掘されている。調査者の指摘のとおり、島根県内ではいずれの場合も周辺で製鉄関連の遺構は発見されていないが、製鉄に関連する可能性をもつ点、注目に値する。

(3) 小林地区在住の永江正（12代）家の家伝によれば、「武士であった先祖が、八重山から降りて、小林地区で たら を起こし、土地を開いた」という。<sup>註5</sup> 戦国末期か近世初頭のことと推定される。また、町内昭和地区的高木晃（11代）家は、1650年代より続き、元は白石の金山に家があり、元の屋敷地には鉄滓がみられ、口伝から 2 代目頃に農業の傍らたらを営んでいたものと考えられる。<sup>註6</sup> この鉄滓散布地の場所は明らかでない。

なお、前述の遠所越え遺跡は、八重山（城跡）頂部（主郭）から尾根伝いに西南西へ約300m行った地点にある。その地点から、さらに宍道町側にわずかばかり降りた所にある。

(4) (3) で紹介した両家の家伝・口伝にもかかわらず、それ以降の伝承等はないし、町教育委員会が行なった近世文書の悉皆調査でも、たらに製鉄に関する記録はないという。近世も半ば以降になると、松江藩の施策もあり、特定の大規模経営者がたらに製鉄を独占するようになり、農民の片手間的な経営は行なわれなくなったと考える。資本力と確立した組織や藩の援助がない限り採算にあわなかつたのであろう。筆者らの経験した小規模な「古代たら復元」（報告を本書に収録）でも、かなりの準備期間と労力やそれなりの技術が必要であることを実感した。小規模とはいえ、たらに操業は決して少人数で簡単にできるものでない。

#### ＜鍛冶津一鉄器生産＞

たらに遺構と違って、鍛冶関連遺構は発掘で明らかになったものがある。以下、簡単に紹介しよう。

【上野 II 遺跡】<sup>註7</sup> 佐々布川下流部に少しばかり開けた平野へ東向きの小さな谷の南側丘陵上にある。平成11年度に、標高約76m前後の高台が約5,100m<sup>2</sup>発掘調査された。検出された遺構の時期は1期から6期までに区分されている。1～3期は弥生時代後期、4～5期は古墳時代中期、6期を奈良・平安時代以降としている。

1期から鉄器を製作しており、鍛冶炉も検出されている。鍛冶炉は簡単な構造のもので、村上恭通氏の分類によると I・II・III・IV類があるという。<sup>註8</sup> 「地下構造を持つ I～III類の鍛冶炉は、地下構造を持たない IV類の鍛冶炉よりも高温での操業が可能である。常に両者がセットで作られる 1期の鍛冶炉の有り方は、鍛冶工房の中で高温鍛冶～低温鍛冶という複数の工程が一貫して行われていたことを示す。」<sup>註9</sup> という。2期の遺構からは、鍛冶炉が検出されていないが、鋸のついた砥石が出土しているので、調査者は鉄器生産は継続していたとしている。3期の遺構からは、IV類の簡単な鍛冶炉が検出されている。1期と比較して、集落の発展する時期であるが、鍛冶の面では衰退しているかのようである。

この遺跡の弥生時代後期の遺構から、鉄器出土とともに板状鉄素材の出土が注目をあびた。この板状鉄素材は、タガネ（？）で切断された面が二つあり、分析結果の所見によると「塊鍊鉄か。焼きなまし？極軟鋼か。」とある。朝鮮半島からの輸入品と考えられている。鍛造剥片とか、鍛冶津の報告はなく、島根県大原郡木次町の平田遺跡<sup>註10</sup>の例から察するに、原始鍛冶が行なわれていたと推定されている。

6期の加工段1覆土から、楕円形鍛冶津（鍛鍊鍛冶津）が出土している。弥生時代後葉の鉄器

遺物の原料が鉄鉱石であったのに対し、砂鉄を原料とするものである。鍛冶炉は検出されていない。

おぎた [荻田遺跡] <sup>註11</sup> 宍道湖南西岸（現在の宍道湖は、その後の沖積作用や昭和時代の埋め立てで様相が一変している）にせまる低丘陵の北西側斜面にあたる。昭和48年に発掘調査され、今の荻田団地内にあたる。6棟の住居跡が検出された。4号住居跡脇から鉄錆、鉄釘、鉄滓、砥石が、5号住居跡から須恵器や吹子の羽口が出土している。5・6号住居跡からは炉が検出されている。炉の詳細については不明であるが、羽口や鉄滓の存在から鍛冶炉であることは疑いない。鉄滓は、楕円形である。

6号住居跡は古墳時代中期、1~5号住居跡は奈良時代と報告されている。しかし、その後の検討で、5号住居跡は古墳時代後期か奈良時代末から平安時代初めの頃か判断できかねることである。このあたりは古代の宍道駅とも推定されている地域で、駅関連の遺構とも考えられる。

つみひら [堤平遺跡] <sup>註12</sup> 白石の小さな谷を見下ろす尾根の中腹及びその北側斜面に位置し、佐為神社の裏山の北向き斜面にあたる。平成10年度に発掘調査が行なわれた。北東向きの急斜面の岩盤を幅約20m、長さ約40mの範囲を切り崩し造成した平坦面が主たる遺構面である。掘立柱建物1棟、布掘り建物1棟、柱穴、長方形の彫り込みのある岩盤が検出された。出土遺物には、灯明皿、壺、鉄鉢形土器、銅製容器破片、鉄器、炉壁片、楕円形鍛冶滓、金属滓、羽口等がある。羽口の先端部外面には鉄滓が付着している。岩盤に彫り込まれた長方形の孔は、板石によって蓋をされていた。舍利孔とも考えられる。小型の塔の存在も推定できる。瓦は葺かれていないが、小規模な寺院跡である。ガラス質滓の表面に緑青状の付着物があり、銅滓の可能性があるという。寺院で必要な鉄器や銅器

を生産していたのであろう。

[白石大谷I遺跡] <sup>註13</sup> 同道川西岸の標高30m前後の低丘陵に存在する。平成8年度に発掘調査が行なわれている。この遺跡で最も目立ったのは、調査区北端の標高約17~18mで検出された横口6個をもつ前述の横口付製炭窯である。I区から、鉄滓9点出土し、調査者はI区西に鍛冶関連の遺構が存在したと推定している。

以上、紹介した発掘された鉄器生産跡や鍛冶滓出土遺跡の様子から次のようなことが言えそうである。

(1) 弥生時代の鉄器生産についてはまだ不明なことが多いが、後期になると、鍛冶炉をもつ工房が当地方にも現れはじめめる。鉄鉱石を原料とする輸入鉄素材を切断して、火炙り後、曲げたりして形を整え、砥石で研磨仕上げして製品化するという原始鍛冶が、本次町の平田遺跡の在りようなどからも頗推されている。「羽口の使用はなく鉛打による鍛接は認められず、当然鉄滓の排出はなくて粒状滓や鍛造剥片などを派生しない簡便な操業」<sup>註14</sup> であることが、古墳時代以降の鍛冶との決定的な差であろうか。

弥生時代のたら製鉄については、疑問視されることが多いが確実な例は知られていないが、最近、大阪府豊能郡能勢町の横町遺跡の例を知った。<sup>註15</sup> この遺跡は、1978年に漁るが、町内田尻川畔の横町で圃場整備事業が進められている中で発見され、調査されたものである。「南北方向の幅20~30cm、深さ20cmほどの溝の南端部に接して、直径約180cm、深さ20~30cmの不正形な円状ピットを呈する遺構が、平行して二基検出された」という。円状ピット内に木炭、灰、鉄滓等がつまつており、遺構周辺は強い火を受けていたようである。想像を逞しくすれば、平面鉄アレイ形の製鉄炉床とされる。遺物包含層の直下地山に掘り込まれたもので、炉

床の上面から畿内第五様式の土器が出土したという。鉄滓粒（現物は散逸）そのものの状況や炉壁片等が出土していない等の問題が残るが、弥生時代後期の製鉄炉が存在した可能性も考えられる。それでも、輸入鉄の方が多かったと思われる。従って鉄器生産はやはり原始鍛冶だったのだろう。

(2) 古墳時代になると、吹子や羽口を使用して高温で加熱する鍛冶技術も発達してきた。島根県安来市の勝負遺跡では、<sup>註16</sup> 中期後半の遺物に精錬鍛冶滓がみられ、土坑SK16は鍛冶炉の可能性があるという。遺構を発掘すると、鍛造剥片なども検出されるようになる。町内のこの時期のものとしては、荻田遺跡のものがあげられるが、当時の調査では鍛造剥片の採取などを行っていないので詳細については不明である。

(3) 奈良時代以降のものとして、荻田遺跡、堤平遺跡、白石大谷I遺跡がある。中でも、堤平遺跡の場合、小規模とはいえ寺院に伴う鍛冶炉という面で特徴的である。羽口の先端部に鉄滓が付着していたということは、炉内の温度が相当に高かったことを示している。ガラス質滓については、実見していないので詳細について不明であるが、高温で炉内がガラス化したのだろうか。報告書記載のように銅滓付着の可能性があるのであれば、銅器製造のための坩埚に関する遺物とも考えられる。羽口に付着する鉄滓や粘土のガラス化については、既に古墳時代の遺跡で知られていることであるが、筆者は県内の例を知らないので、ここで取り上げた。

(4) 中世のものには、本稿で紹介した雲松寺（猪道）山城跡南支郭群の鉄滓と炉壁片？ある。明確な遺構を伴うものでなく推測の域を脱しないが、郭に伴う鍛冶炉から排出されたと考えるのが最も無難のようである。今後の類例や研究に待ちたい。

## 将来の研究の展望

まだ不明なことが多く、研究の序の口といったところであるが、宍道町内でもかなり古い時代からたら製鉄が行なわれ、鉄器生産が行なわれてきたことが明らかになった。今のところ、たたら製鉄に関しては江戸時代初め頃までしか確認していないし、鍛冶関係の遺跡は中世までである。遺跡の分布調査をさらに続け、散布する鉄滓の観察・分析などをなすことによって、きめ細かい論証が可能になる。例えば、製錬滓と鍛冶滓の分布状況、地形・地質など立地との関係、遺構の営まれた年代などがある。また、鉄関係遺跡の研究となれば、鉄穴流しや製炭窯の調査も欠くことができない。両者とも困難なことが多いが、根気強く行なう必要がある。鉄関係遺跡の分布調査については、地名が有力な手がかりになるということを無視できない。<sup>註17</sup> ある地域でこの地名は鉄関係の産業が存在したから、ここでも同じ産業が営まれていたはずだという安易な考えは許されないが、可能性ある地名はていねいに調べる必要がある。幸いにして、宍道町では、ていねいな小字の研究がなされ結果を公刊しているので便利である。<sup>註18</sup>

註1 桂敬「製鉄遺跡で採取される鉄滓の組成」『季刊考古学第8号』（雄山閣）1984年8月

註2 齋田藏郎『図説日本の文化をさぐる[7] 鉄の文化 人間と鉄の4500年』（小峰書店）1990年4月より転載

註3 清水秋吾「鉄器・鉄滓の分析」『月刊考古学ジャーナルNo.313』（ニュー・サイエンス社）1989年12月

註4 高安克己『宍道町ふるさと文庫4 宍道町が海だったころ』（宍道町教育委員会）1993年3月

註5 宍道町・宍道町教育委員会『宍道町史料目録I』2001年3月

- 註 6 宍道町・宍道町教育委員会『宍道町史料目録Ⅱ』  
2002年3月
- 註 7 島根県教育委員会『中国横断自動車道尾道松江  
線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書10  
上野Ⅱ遺跡』2001年12月  
拙著『宍道町ふるさと文庫14 鉄と人』(宍道町  
教育委員会) 2000年3月
- 註 8 村上恭通『シリーズ日本のなかの考古学 僕人  
と鉄の考古学』(青木書店) 1998年9月より I  
～Ⅲ類の特徴は次のとおり  
I類：掘り方を大きくとり、その内壁、底をよ  
く焼き締め、そのなかに木炭や土を交互  
に重ねた防湿施設（地下構造）を備える  
タイプ。平面形は円形や橢円形がある。  
II類：掘り方のみで、その内壁がわずかに焼け  
ているタイプ。さまざまな平面形がある。  
III類：ほとんど掘り方をもたず、床面をそのまま  
ま炉として使用する状況に近い。
- 註 9 註7の文献「上野Ⅱ遺跡」より転載
- 註10 木次町教育委員会『平田遺跡』2000年
- 註11 村上勇「宍道・荻田住宅団地遺跡（I）」「島根  
県埋蔵文化財調査報告書XⅡ」(島根県教育委員  
会) 1986年3月  
村上勇「宍道・荻田住宅団地遺跡（II）」「島根  
県埋蔵文化財調査報告書XⅣ」(島根県教育委員  
会) 1988年3月  
宍道町教育委員会『宍道町歴史叢書3』1998年3月  
拙著『宍道町ふるさと文庫14 鉄と人』(宍道町  
教育委員会) 2000年3月
- 註12 島根県教育委員会『中国横断自動車道尾道松江  
線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書8  
堤平遺跡』2002年2月  
宍道町史編纂委員会『宍道町史 史料編』(宍道  
町) 1999年7月  
拙著『宍道町ふるさと文庫14 鉄と人』(宍道町  
教育委員会) 2000年3月
- 註13 島根県教育委員会『中国横断自動車道尾道松江  
線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書7  
白石大谷Ⅰ遺跡・惣三瀬遺跡・堀田ヶ谷遺跡・  
地蔵院遺跡・熊谷遺跡』2002年3月  
宍道町史編纂委員会『宍道町史 史料編』(宍道  
町) 1999年7月  
拙著『宍道町ふるさと文庫14 鉄と人』(宍道町  
教育委員会) 2000年3月
- 註14 大澤正巳「上野Ⅱ遺跡出土鉄関連遺物の金属学  
的調査」(註7の文献「上野Ⅱ遺跡」より転載)
- 註15 能勢町教育委員会『野瀬町埋蔵文化財調査報告  
地黄北山遺跡・横町遺跡調査外報』1980年3月
- 註16 島根県教育委員会『一般国道9号安来道路建設予  
定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区10  
勝負遺跡・堂床遺跡』1998年3月
- 註17 白石祐臣「出雲・石見における產鉄－海人系に  
よる地名と伝承を含めて－」「金属と地名」(三  
一書房) 1998年5月
- 註18 黒田祐一『宍道町史史料集（地名編）』(宍道町  
教育委員会) 1995年3月
- 註19 深著『宍道町ふるさと文庫14 鉄と人』(宍道町  
教育委員会) 2000年3月
- 註20 宍道町上来待小林在住 永江正氏の案内による。  
永江正（12代）氏家の家伝によると、「先祖が八  
重山から下りて たら 行った」という。  
ただし、この家伝の具体的な内容は不明。
- 註21 宍道町上来待菅原在住 犬野忠義氏のご教示に  
よる
- 註22 宍道町教育委員会『宍道町埋蔵文化財調査報告  
書8 宍道町遺跡地図』1993年3月



1トレンチ No.4 銀治津



2トレンチ No.13の内1破片 銀治津



2トレンチ No.3 銀治津



3トレンチ No.1 銀治津



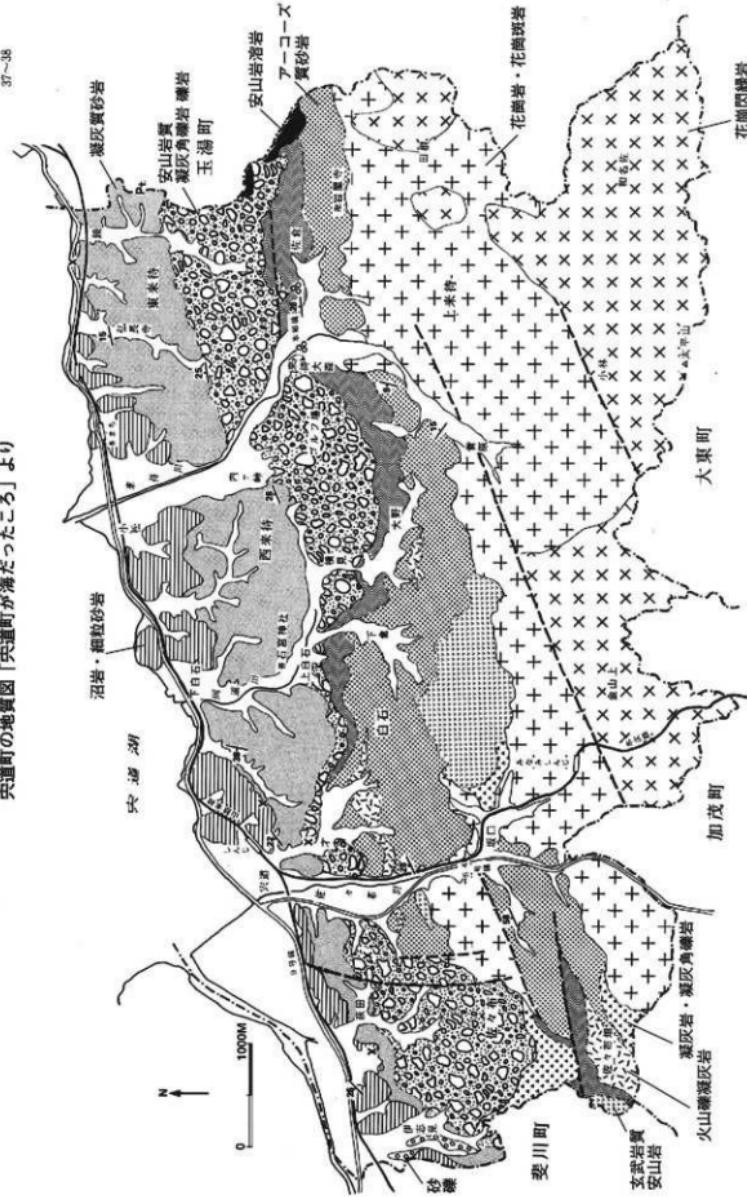
2トレンチ No.4 銀治津



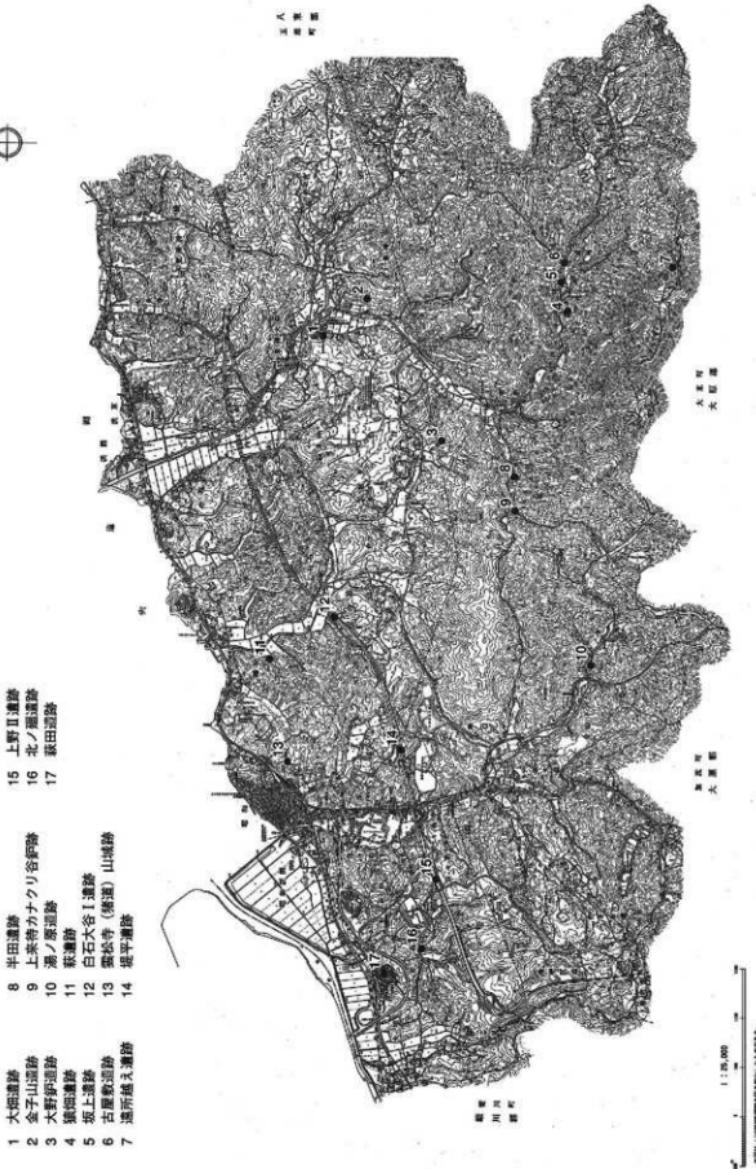
2トレンチ No.12 炉壁片?

雲松寺（猪道）山城郭南支群出土鉄関係遺物

宍道町の地質図「宍道町が海だったころ」より



穴道町内の鉄洋出土遺跡分布図



## 附 古代たら復元教室の実験レポート

石井 悠

### 1. はじめに

古代たら復元教室は、古代たら製鉄復元の体験をとおして、うずもれた地域の歴史的な記憶を思い起こし、地域に残る歴史的遺産を子どもたちの教育に活かすことを目的に、平成12年7月28日（金）～29日（土）、宍道町上来待菅原農村公園で中学生及び小学生を対象におこなった事業で、本稿はその報告である。

### 2. なぜ宍道町で「たら」復元か

宍道町の南側は、砂鉄を含む花崗岩地帯となっている。古い時代には、この砂鉄を利用して、たら製鉄が行われていた。鉄滓散布地もあるし、古代のたら炭を焼いたと推定される炭窯も町内で検出されている。

しかし、今では、たら製鉄が行われていたという事実を知る者も少なくなっている。こうした事情から、ふるさとの歴史を振り返り、ふるさとをもう一度問い合わせることも有意義であると考えた。そこで、町内のいくらかの人々に、たら製鉄を再現してみようという計画を打ち明けたところ、予想以上の反応があり、また惜しみのない協力の申し出を受けることができた。

特に、事業実施場所となった菅原地区の住民の方々を始めとする多くの方々の賛同と協力があつて計画を進めることができた。

事業は、宍道町教育委員会と宍道ふるさと学習センターが主体となり、日刀保たら（仁多郡横田町大呂）の村下で国選定保存技術保持者である木原 明氏の指導を得て行なうことになった。教育委員会では、学社融合事業として位置づけ、中

学生を主な対象として、「古代たら復元教室」を開校することとなった。事業実施場所の選定にあたっては、周辺にたら製鉄遺跡が存在し年配の方々から鉄滓散布地などに関する情報が得やすい地域であること、適当な広場、施設にめぐまれた場所ということに留意した。その結果、上来待の菅原天満宮下の菅原農村公園が適地と認められた。

### 3. 古代たらの復元

実験は結論から言えば、町外からの多くの参加者も得て、大成功のうちに終了することができた。古代たら復元の意義としては、次のような二点を考える。

特定の古代たらを想定して復元したわけではないが、飯石郡掛合町の羽森第3遺跡に近いものとなった。この遺跡は、6～7世紀のものと推定されている。東西の直径約60cm、深さ約40cmの炉床が検出され、炉床の両側には排滓孔が検出された。炉壁片より円筒形（シャフト）炉を考えられ、ホド穴も確認されている。具体的な装置は不明であるが、吹子も使用されていたようである。出土した鉄滓から、操業温度は低いが、真砂砂鉄を利用した鋸押し操業が行われていたと推定されている。

今回の復元たたらは、真砂土を突き固めた土俵状の土壤を形成し、その中央に直径60cm、深さ25cmのピットを穿ち、内部で燃焼材を燃やし、焼の状態で叩きしめるという工程の繰り返しによる炉床（カーボンベット）づくり、いわゆる下灰づくりからはじめた。炉床の上に円筒形（シャフト）

炉を築き、プロアーと手押差し吹子による送風で操業を行った。粘土、木炭、砂鉄は島上木炭銑工場（日刀保たたら）で用意してもらった。7月29日の午前4時30分の火入れに始まり午後3時10分の鉢出しにいたる操業の結果、当初の予想をはるかに越え、約20kgの鉢を得ることができた。技術的にかなりの工夫改善が行なわれていて、厳密な意味での復元とは言えないが、古代たらにについての大凡の感触を得ることができた。貴重な体験であった。考古学的な面での意義といえる。

連日の猛暑の中で、ときにはつらい体験の結果、予想以上の成果が得られ、参加した子どもたちに感動を与えることができた。また、ボランティアとして参加した人、各地から集まった見学者など多くの人々からも喜んでいただいた。学社融合事業としても成功したと思うし、地域を見直すひとつの材料になったのではないかと思う。これが、第二の意義と考える。

文部省の学習指導要領改訂により、平成14年度から学校教育現場では「総合的な学習の時間」の設置が義務づけられ、各学校では様々な取り組みが行なわれている。この時間は、各学校の創意工夫を生かして実施するものとされ、地域社会の協力を得ながら各種体験学習を含むものとされている。たら復元の体験をテーマのひとつとして選択することも可能である。しかし、「古代たら復元教室」は今回限りのものであるし、宍道町内の学校が「総合的な学習の時間」のテーマとして取り上げるには困難な点が多い。それでも、この事業によって地域社会との連携という面について学んだこと多く、「総合的な学習の時間」の推進に参考となろう。

事業の成功の秘訣は何かと問われれば、多くの善意あふれた協力を得たこと、木原村下をはじめとする専門家の直接の指導があったこと、子どもたちが興味を持ったことの三点を答えることがで

きる。以上のいずれが欠けても、事業としての成功はなかったと考える。

#### 4. 古代たら復元操業の記録

準備から片付けまでの計画及び事業の推進は教育委員会の稻田信氏と筆者石井悠により行なった。以下、その概略を記すことにする。

##### (1) 準備

###### フレ準備

ほんやりとした構想は、平成12年2月頃であった。稻田氏との話の中から出てきたものである。4月6日（木）に安来市の和鋼博物館で、たら復元について話しを伺ったのが、行動の第一歩であった。

その後、4月25日（火）に、稻田氏と日刀保たらの木原 明村下を訪ね、宍道町でのたら復元について協力を要請したところ、即座に引き受けさせていただいた。続いてその場で具体的な指導を受け、それが本格的な計画立案へつながった。木原氏の指導を受けているときに、4月29日（土）と30日（日）の二日間で広島県庄原市の備北丘陵公園にて、「古代たら」を行なうので見学に来てもよいと案内を受けた。早速、筆者は4月29日（土）に出かけて見学させていただいた。たら復元の経験がなかったので、設備や使用器具とか焼炉の状況を実際に見学できたのは、その後の計画立案に益するところが多く、大きな収穫であった。

###### 計画立案

事業の実施は7月28日（金）～29日（土）に決定し、事業推進の具体的な計画立案に取りかかったが、次のような点が問題として浮かび上がってきた。

- ① 復元操業を行なう場所の選定
- ② 炉床づくりに必要な材料と技術及び労働力
- ③ 必要な原材料や備品の確保

## ④事業実施の具体的な形態

⑤上記内容に伴う費用

## ⑥事業の宣伝

これらの問題点に苦慮したが、次のように解決することができた。

①について、周辺にたらたら製鉄遺跡が存在し年配の方々の鉄滓散布地などに関する情報が得やすいこと、適当な面積、施設にめぐまれているということで、上来待の菅原天満宮下の菅原農村公園を選んだ。②について、(有)飯塚組の献身的な協力を得ることができた。炉床と覆屋の設置及び撤去にかかる費用全額が飯塚組の負担で行なわれた。下灰づくりの作業では、菅原地区住民や宍道町教育研究会員の助力を得た。③について、粘土、砂鉄、木炭などの原材料は日刀保たらから購入した。備品について、一般的なものは地元菅原地区、宍道町教育委員会、宍道町中央公民館、来待小学校、宍道中学校から借入、若干のものは購入し、専門的なものについては日刀保たらから借り受けた。④について、宍道町教育委員会の学社融合事業に位置づけ、中学生を主体に「古代たらたら復元教室」として実施した。⑤について、この事業にかかる費用全額の公費負担は困難で、事業の実施が危ぶまれたので、飯塚組の負担や(株)新東亜工業、地元住民からの燃焼材提供、地元住民や宍道町教育研究会員のボランティア活動によって経費の支出を制限するよう努めた。⑥について、町内の有線放送、各報道機関を利用した。

## 炉床づくり

7月25日(火)～27日(木)の三日間で行なった。前述のとおり、(有)飯塚組の協力を得て炉床づくりと覆屋建設を7月25日に行ない、26日、27日の二日間は炉床の乾燥から下灰作業を行なった。下灰作業は、地元菅原地区住民と宍道町教育研究会員のボランティア作業によるもので、炎天下に火を使うという重労働であった。

## 築 炉

7月28日(金)から、「古代たらたら復元教室」を開校した。参加した子どもの体験学習は、築炉から始めた。

開校式後、木原村下から子どもたちへの講話が行なわれ、炭切り(実際には、ナタや斧で割る)作業と築炉用粘土ブロックづくりから開始した。炉床の上に粘土ブロックを積みあげる作業にも子どもが参加して行なった。炉の乾燥作業まで含めると、深夜まで続く作業であるが、第一日目は、午後3時頃に子どもの作業は終了した。中釜上端まで約70cmを積み上げ、炉の内外に燃焼材を置き、点火乾燥させて後、上釜を積み再度点火乾燥を深夜まで続けた。

なお、宍道町佐々布字上野の上野II遺跡で採取された粘土塊をサンプルとして炉頂の一部に埋め込んだ。これは、上野II遺跡で検出された鍛冶炉と推定される部分の被熱部分と比較検討するための試験として行なった。後述のように、炉内の温度測定とともに、時々炉頂の温度測定も実施した。

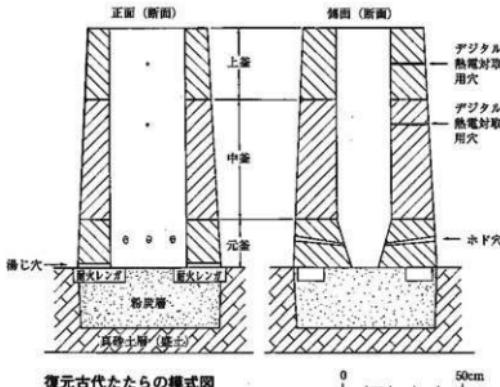
## (2) 操業

7月28日(金)の午前4時30分に火入れを行なった。その後、炉が充分に熱せられた6時15分に狩野教育委員長の手により初種の儀を執り行ない、本格的な操業に入った。炉内の状況に応じて、子どもたちの手により木炭と砂鉄を約10分前後の間隔で装入を続けた。砂鉄装入の時間、回数、装入量等については、表1のとおりである。

炉の管理は、木原明村下を中心に山本哲也氏、堀尾薫氏によって行なわれ、福原博文氏(ボランティア参加の島根大学学生)、久保田一郎氏(島根県埋蔵文化財調査センター)が補助した。送風は、プロアーにより開始し、途中子どもたちによる手押差し吹子での送風を行なった。

約100kg用意した木炭は全てを使用した。木炭

の装入は火入れから継続して行ない、初種以後は1回2kgずつ装入した。その後は、2kgの木炭が燃焼したところで、砂鉄→木炭の順で装入した。砂鉄は40回の装入で62.5kg使用した。できた鉢は、後日測定したところ約20kgであった。鉢出しの際に測定した鉄滓の重量は51kgであったが、全てを回



取したとは言えず、正確な重量を知ることはできなかった。実際には1.5倍以上の鉄滓が生じたと考えられる。

操業の進行にともない、デジタル温度計を使用して炉内（内壁から2cmの部分に熱電対の先端をセットした）及び炉頂（熱電対を炉の上部から直接入れた）の温度を測定した。結果は、次のとおりである。この温度測定は、上野II遺跡で採取された粘土塊をサンプルとして炉頂の一部に埋め込むという試験に伴うもので、元釜部分での測定を実施していなかった。事業の円滑な進行に気を取られたため、鉄滓の重量や温度測定その他の記録が不十分であったことが悔やまる。

元釜部分での温度測定について、島根大学の田中義昭教授を中心としたグ

ループが1990年に行なった実験では、鉢は生成されなかつたがホド穴付近の炉内温度は1200°C前後まで上昇している。また、1997年に熊本県立装飾古墳館で行われた「古代たたら製鉄復元」（3基の炉）では、元釜上端部分の炉内温度は概ね1300~1400°Cまで上昇している。前者の場合、鉢ができなかつた理由として吹子の故障による温度低下が主な原因と報告されている。砂鉄の溶解には1300°Cが必要のようである。今回も1300°C前後と推定している。

### (3) 片付け作業

覆屋および土俵状土壇の撤去は、（有）飯塚組が行なった。炉壁片、土俵状土壇の真砂土は、狩野委員長と地元の了解を得て公園の一画にまとめさせていた

だいた。

炉床部分を撤去するにあたり、炉床の中心部を断ち切りその断面を写真撮影した。焼を叩き締めるという作業をくりかえしたため、炭は粉状を呈していた。ピット周辺は若干変色していたが、硬く焼き締まるというほどではなかった。

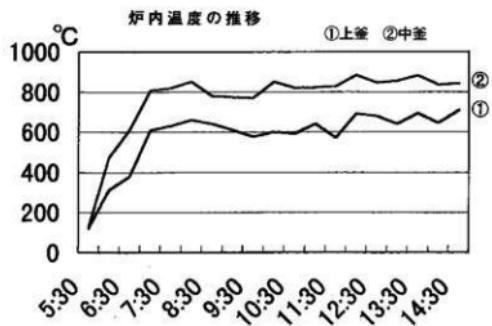
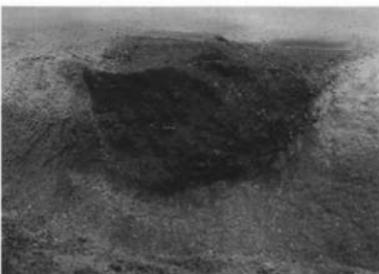


表1 砂鉄装入の記録

作業内容	時刻	投入重量	備考
火入れ・送風	4:30		
砂鉄装入	6:15	0.5kg	プロアー使用
砂鉄装入 2回目	6:32	0.5kg	
砂鉄装入 3回目	6:40	1.0kg	
砂鉄装入 4回目	6:52	1.0kg	
砂鉄装入 5回目	7:00	1.0kg	
砂鉄装入 6回目	7:15	1.0kg	
砂鉄装入 7回目	7:25	1.0kg	
砂鉄装入 8回目	7:35	1.0kg	
砂鉄装入 9回目	7:48	1.0kg	
砂鉄装入 10回目	8:02	1.0kg	
砂鉄装入 11回目	8:15	1.5kg	
砂鉄装入 12回目	8:33	1.5kg	
砂鉄装入 13回目	8:47	1.5kg	
砂鉄装入 14回目	9:03	1.5kg	
泥じり貫通作業	9:15		
砂鉄装入 15回目	9:22	1.5kg	
砂鉄装入 16回目	9:40	1.5kg	
吹干使用開始	9:50		プロアー停止
砂鉄装入 17回目	9:55	1.5kg	
砂鉄装入 18回目	10:08	1.5kg	
砂鉄装入 19回目	10:25	1.5kg	
プロアー再開	10:37		吹干停止
砂鉄装入 20回目	10:51	1.5kg	
砂鉄装入 21回目	11:00	1.5kg	
砂鉄装入 22回目	11:09	1.5kg	
砂鉄装入 23回目	11:20	1.5kg	
砂鉄装入 24回目	11:32	2.0kg	
砂鉄装入 25回目	11:50	2.0kg	
砂鉄装入 26回目	12:01	2.0kg	
砂鉄装入 27回目	12:09	2.0kg	
砂鉄装入 28回目	12:17	2.0kg	
砂鉄装入 29回目	12:28	2.0kg	
砂鉄装入 30回目	12:38	2.0kg	
砂鉄装入 31回目	12:46	2.0kg	
砂鉄装入 32回目	12:54	2.0kg	
砂鉄装入 33回目	13:05	2.0kg	
砂鉄装入 34回目	13:18	2.0kg	
砂鉄装入 35回目	13:26	2.0kg	
砂鉄装入 36回目	13:34	2.0kg	
砂鉄装入 37回目	13:39	2.0kg	
砂鉄装入 38回目	13:52	2.0kg	
砂鉄装入 39回目	14:04	2.0kg	
砂鉄装入 40回目	14:17	2.0kg	
サンブル切り取り	14:55		
砂鉄体開始(漏出)	15:10		送風停止
漏出却	15:30		
砂鉄装入重量		62.5kg	

表2 炉内温度の推移

計測時間	炉頂(℃)	上蓋(℃)	中蓋(℃)
5:30		130	130
6:05		313	474
6:30		380	610
7:00		608	808
7:30		630	819
8:00		660	830
8:15	610		
8:30		640	780
8:47	610		
9:00		610	775
9:30		577	770
10:00		600	850
10:23	630		
10:30		592	820
11:00		641	823
11:30		571	828
12:00		691	884
12:30		680	846
13:00		640	856
13:30		695	882
14:00		645	836
14:30	625	710	843



操業終了後の炉床断面

## 写真解説 (19~25ページ)

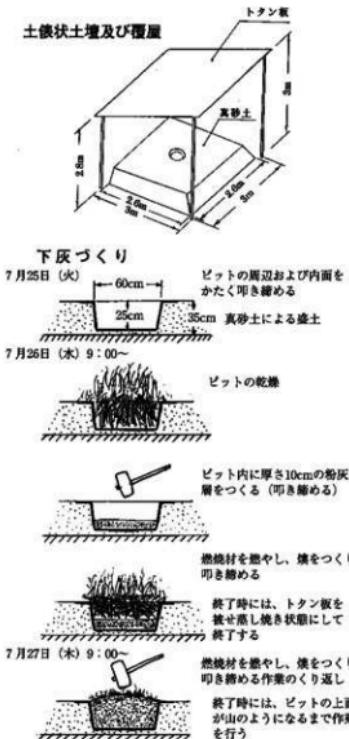
## 炉床づくり

たらば製鉄では、炉内に水分が入るのを極端にきらう。

というのは、炉内の温度上昇を妨げるし、場合によっては水蒸気爆発を誘発することにもなりかねかい。そこで、炉の地下にあたる炉床づくりに大変気をつかう。地下から炉内への水分の上昇を防ぐことを目的として、地下部分を充分に乾燥させるのである。古代のものは、次に述べる復元たらばのようなピットをもつ簡単な構造であるが、中世から近世へと時代が進むにつれて複雑な構造のものとなる。江戸時代半ば以降になると、おおがかりな高殿(たかとの)たらばがつくられ、その地下構造は高殿を支える押立柱の内側の広い範囲で2~3mに及ぶ深い穴を掘り、本床(ほんどこ)、小舟(こふね)と呼ばれる構造などをもつ複雑なものとなる。

復元たらばは、2トントラック25台分の真砂土(穴道町内産で目が細かく若干粘性のあるもの)で一辺3m、高さ35cmの土俵状の土壇をつくり、中央に直径60cm、深さ25cmのピットを穿った。土壇そのもののピットの内面と周辺を充分にかたく締めた。このピット部分が炉床となる。操業中雨が降った場合、炉内に水が入らないように、鉄バ

イブおよびトタン板による高さ2.8~3mの覆屋を建設した。ピットの内部で燃焼材を燃やし乾燥させた後、さらに燃焼材を燃やし燃え尽きる前の燃の状態で叩きしめる下灰（したはい）作業を繰り返し行った。乾燥に半日、下灰作業に約1日半（夜間は除く）を費やした。実際には、次に示す図のようを行った。充分にかたく締めないと、安定した炉を築くこともできないので、かなりの重労働であった。



#### たたら用木炭

たたら用の木炭は完全に炭化しきっていないものを用いる。燃焼中に発生するガスも燃焼させて、より温度をあげようとするためである。樹種は、

クスギ系のものが多く使われてきたという。今回の炭は、日刀保たたらで用意してもらった雑木製のもので、4~5cm大に割って使用した。

#### 築炉用粘土

洋式の製鉄炉と異なり、炉（釜）は粘土によって築かれている。釜土は溶媒剤としての役割もち、操業にあたって石灰石を加えたりしない。釜土用粘土の善し悪しは、錆の成長に大きく影響する。錆の成長とともに炉の内部は侵蝕され、操業の終了間際に、元釜部分はかなり薄くなる。釜土用粘土として（1）築炉に必要な粘性があること（2）適度な耐火性があること（3）錆の育成を助成するため溶融鉄酸化物と反応し、適度な侵蝕性をもつこと（4）砂鉄の溶融鉄酸化物と反応して混合溶融した鉄滓をつくるが、この成分が低溶融であること 以上の性質をもったものが良いとされている。今日では、真砂粘土と赤土粘土の混合物を使用している。今回使用の粘土はあらかじめ日刀保たたらで調合してもらった。古代たたら遺跡出土の炉壁片には、スサを混ぜてあるのが特徴的だが、今回は混ぜていない。

#### 築 炉

これまで島根県内で発掘された古代のたたら製鉄遺跡では、小形の隅丸方形炉と円筒形（シャフト）炉が採用されていたようである。

今回は、後者を採用した。炉床直上に基礎となる耐火レンガ4を据えつけ、その上に粘土ブロックを積み上げた。基礎となる部分の元釜の壁面は厚く内側で傾斜面をもたせてある。ある程度積み上げられた後、炉の前後両面から、送風および観察用のホド穴3ヶ、左右両側の基底部にノロ排出用の湯じ穴各1があけられた。その後約70cmの高さまで中釜を積み上げ成型した後、釜の内外に燃焼材を入れ点火して、炉の乾燥作業を行った。ある程度乾燥させた後、さらに上釜を積み、成型してから、中釜のときと同様な乾燥作業を深夜まで

続けた。藁炉と並行して、吹子やプロアーからの風を配るための風箱を固定したつぶりを炉の前後に設置する。炉が乾燥すると、つぶりと炉の間に木呂をとりつける。今回の復元たらの操業にあたって、炉内の温度を測定するため、中釜、上釜の部分に温度測定用熱電対取り付けの穴（直径約8mm）をあけた。

### 砂 鉄

砂鉄は、その採取される場所によってそれぞれ山砂鉄、川砂鉄、浜砂鉄と呼ばれ、含まれる成分によって真砂（まさ）砂鉄と赤目（あこめ）砂鉄に分類されている。一般に、真砂砂鉄は溶けるのに時間がかかり鋼を主体とした製品ができ、赤目は比較的低温で溶けて銑（ずく）になりやすいという。仁多郡横田町と鳥取県日南町の境に聳える舟通山（出雲國風土記では島上山）の周辺では純度の高い真砂砂鉄を産する。砂鉄の採取方法として、かつては鉄穴流しと川に堆積した砂鉄を掬い取る方法が主流であったが、現在では、鉄穴流しは行なわれず横田町の羽内谷鉱山で島上木炭鉄工場により磁力選鉱が行なわれ真砂砂鉄が採取されている。

### 錬 出 し

木炭や砂鉄の装入と送風を停止した後、炉を崩し錬を取り出す作業を錬出しと呼んでいる。たたら操業の中で、ハイライトとも言うべき場面である。参加した子どもたちを中心にして行なった。上釜から順に炉を崩すと、元釜の部分が侵蝕されて薄くなっているのがわかる。炉壁片を取り除くと、灼熱の鉄塊が見える。これが錬である。

錬を冷やす方法には、自然に冷えるのを待つ場合と、水中に浸して冷やす場合があるが、今回は後者を採用した。ドラム缶に水を溜め、その中に灼熱の鉄塊を入れて冷やした。水は直ちに沸騰して泡だったが、しばらくは水中でも鉄塊は赤く焼けた状態であった。

冷えた鉄塊の表面は、酸化して黒光りしていた。子どもたちが手にしているのは、錬とともにできた、歩錬（ぶげら）、銑、裏錬（うらざく）等である。

### 参加・見学者の声

#### 「たらに行つて」

宍道町立宍道中学校1年 井 上 雄 貴  
ぼくは、夏休みの自由研究をこれにしようと思いました。  
たらでは、ねん土ブロックをつくったりそれを積みかさねて炉というものをつくったり、中に砂鉄を入れて、最後には炉をこわして、錬というものを取りだしました。中でも、ねん土ブロック作りや、ふいごで風を送ることや、炉をこわすのが楽しかったです。玉はがねというものを作るのは、大変だと分かりました。ここへ来て、いろいろなことを教わり、勉強になりました。また、このような機会があれば来てみたいです。

#### 「古代たら復元教室に参加して」

宍道町立宍道中学校1年 土 江 典 子  
一番印象にのこっているのは、ねん土をこねたところと取り出した鉄を水につけたしゅん間です。ねん土をこねた時は、暑くてこねるのが大変だったけど、作るのは楽しかったです。作っている途中に、人ときそつたり、3人くらいですごく大きくねつたりしました。ねん土が少しづつ減っていき、全部なくなつて、「やつたー」と思つたら「じゃあ次持つてくる」と言われ、その時はもうだめだと思いました。でも一生けん命できてよかったです。次に、取り出した鉄を大きな水の入ったようきに入れたしゅん間、ものすごい音がし、その音はボコボコと、大ふつとうしたみたいで、それからゆでたまごみたいなにおいがしておどろきました。この機会を通して鉄についてい

いろいろ調べたりして、楽しかったし、とてもよい体験をしたなあと思いました。私が鉄について調べたのは、ごく一部だからもっともっと鉄について知りたいなあと思いました。

#### 「古代たら復元教室に参加して」

宍道町立宍道中学校1年 坂 本 翼

最初は、たたらってなんだろうと思っていましたが、説明などを聞いて少し分かりました。鉄つくりは、暑くて苦しかったのですが、最後には良いものができるよかったです。

このけいけんで、最後までやれば結果がでてくるということがわかりました。いい思い出をつくれてありがとうございました。

#### 「たら教室」

宍道町立来待小学校6年生 坂 本 昂 広

次にたらを見に行きました。だいぶ火が弱くなっていました。大人の人や中学生の人達が、つつ状のかまをつついでこわしました。中には、大きな鉄のかたまりがありました。一人のおじさんが、大きなベンチみたいな道具で持ち上げて、水の中に入れました。

「ジージュー」という音と共に一しゅんに水がお湯になって、ブクブクとえたぎって、ものすごいむりがでました。ぼくは、すごいはく力だなあと思いました。その後しばらくして、おじさんが水の中から鉄のかたまりを取り出しました。ぼくは、やっとできたんだなあと思いました。そして、あれほどがんばったのに、たったこれだけしかできなかつたのに少しおどろきました。

修学旅行で見学した日本鋼管福山製鉄所は大きな高炉で鉄鉱石をとかしたり、いくつもの大きな炉がある近代化された工場だったのを思い出しました。そこで出来る鉄の量はくらべものにならないけど始めはこうやって鉄を作ったんだなあと

思いました。

【この感想文の前半はカットしております。】

鈴木卓夫「たたら製鉄と日本刀の科学」雄山閣（1990年7月20日）

田中義昭「生きる鉄－考古学の面から」1997年シンポジウム 生きている鉄報告書（（財）鉄の村歴史地域振興事業団 1998年6月）

掛合町教育委員会「飯石地区農道離着陸場整備事業に伴う羽森第2、羽森第3遺跡発掘調査報告書」（1999年3月）熊本県立装飾古墳館「平成11年度前期企画展 古代たら製鉄－復元の記録－」（1999年7月20日）

石井悠「宍道町ふるさと文庫14 鉄と人」宍道町教育委員会（2000年3月31日）

（事業主体：宍道町教育委員会・宍道ふるさと学習センター）

狩野忠良、高岡信也、石井 悠、稲田 信、桑野尚文、多久田友秀

（講師）木原 明（日刀保たら村下）、山本哲也（村下養成員：刀匠）、堀尾薫（同）

（協力者）福原博文、狩野道彦、土江幸一、狩野勝義、狩野 修、菅野孝基、煎沢良治、狩野和志、持田 要、煎沢南征、狩野利美、狩野 学、狩野繁雄、狩野精治、久保田一郎、来待史話会、（有）飯塚組、（株）新東亞工業、島根県埋蔵文化財調査センター、宍道町教育研究会

本稿は、平成12年7月28日～29日に行なった「古代たら復元教室」のレポートである。本稿の執筆及び編集は、石井悠が行なった。本稿掲載の写真は、宍道町教育委員会、石井悠が撮影したものを主に使用し、宍道町総務課及び参加生徒（土江葉菜子）の撮影したものも使用した。記して謝意を表する。本稿掲載の砂鉄装入の記録及び炉内温度の推移に示されたデータは、島根県埋蔵文化財調査センター 久保田一郎氏によるものである。



土俵状土壇の造方設定



土俵状土壇のてん圧作業



真砂土の追加撒入



炉床ピット成形作業



覆屋建設



燃焼材を折る作業



炉床ピットの乾燥



下灰づくり



炭切り作業



炭切り作業



金土用粘土投入



染炉用粘土ブロックづくり



炉の基礎づくり（耐火レンガ設置）



染炉（元釜部分）



築炉（元釜部分）



築炉（元釜部分）



築炉（中釜部分）



縄でしめる作業



炉の乾燥



サンプル粘土とりつけ（炉頂）



つぶり取り付け作業



深夜に及ぶ炉の乾燥



火入れ（7月29日 午前4時30分）



初種の儀



木陰でたたらの学習



ホド穴から炉内の状況を観察



ノロを出す



手押しし吹子を押す



木炭の量を測る



砂鉄町（こがねまち）に見立てる



炭の装入



砂鉄の量を測る



砂鉄の装入



鉢出しを見る



鉢出し作業



水冷中の鉢を見る参加者



冷やされた鉢を見る



鉢出し作業



鉢を水に入る



真赤に燃えている鉢



水中の鉢



手にとって見る歩鎧・銛・裏銖などの小片



開校式に参加した人々

# 宍道町宍道地内の古代山陰道遺構について

池橋達雄

## はじめに

宍道町では平成14・15(2002・2003)両年度に、あとの図1に示すような都市計画に基く道路建設事業が行われることとなり、14年度は菟古館西方から同館前の隨音寺池を通過して上野原にいたる区間の工事が行われた。

工事に先立って予定地の遺跡存否を確認する調査が行われ、とくにここに古代山陰道の道路遺構があるかどうかが問題となった。私は、同町教育委員会からこのことについての調査に参加するよう求められたので、平成14年7月から同15年3月まで、町教委の稻田信氏とともに、あるいは単独に、現地の調査を行った。

以下はその報告である。

## 1. 隣接する宍道町佐々布地区の調査

このたび私に調査依頼があったのは、平成9年(1997)に私が佐々布地区の道路遺構調査にかかわったことに関連する。

平成6年(1994)から文化庁・鳥取県教育委員会による「歴史の道」調査事業が行われた。この調査は近世の状況を中心に行われたものであって、石富寅芳委員と私とで宍道町内を担当したが、そのとき、佐々布地区の近世道の一部が「出雲國風土記」(以下風土記と略記する)が記す古代山陰道(以下古代道と略記する)と重なっているのではないかと考え、とくにこのことについて「宍道町西部の古代山陰道をめぐってー『出雲國風土記』記事と実地踏査から」と題した小論を書き、「宍道町歴史叢書2・歴史の道研究(1)」(1998年3月)で発表させていただいた。

その小論の中心点は、佐々布地内の一帯の道が古代・中世・近世と重なって用いられたものであって、古代道の遺構を認めることができるというところにあるが、道について記述する場合、その部分の両方向の延長についても言及する必要があるので、東の宍道地内と西の伊志見地内についても古代道の推定路、を考えたのであった。<sup>(1)</sup>

上記のうち、西の伊志見地内の古代道については、それをさらに延長して斐川町の学頭地内・神庭地内・三郷地内・直江結地内を経て、私の推定する神水地内の出雲郡家比定地まで遺構などを掲げて言及したが、東の宍道地内については、宍道駅と宍道郷庁の比定地についてあれ、さらに東方白石地内西端までについて古代道推定ルートを繋引きしたに止めている。

今回のこの小論は、宍道地内全域について古代道の遺構を探し、古代道ルートをできるだけ詳細に復元してみようとするものである。

さきに推定した宍道地内の古代道ルートが正しいとすると、このたび建設される新しい道路と隨音寺池付近でクロスすることになる。

## 2. 宍道郷庁と宍道駅の位置

前的小論で考えた宍道郷庁と宍道駅の比定地について再言しておきたい。

風土記の道度の項と駅路の項は、古代道について、出雲國守・意宇郡家・黒田駅(いずれも同所にあった)から西へ向かって記述している。

道度の項では、そこから12里で野代橋、7里で玉造街、9里で来待橋、14里30歩で佐雜崎と記されており、国序(意宇郡家・黒田駅)から佐雜崎

までは42里30歩となっている。佐雜崎は、現在の佐々布地内と伊志見地内の境を南から北へ続く尾根であるが、当時は、これが意宇郡と出雲郡の境であった。古代道はこの尾根を越えていたが、その地点はいまのJR山陰線が走る尾根の先端のところがら南へ約800メートルほどのところであったと私は考えている。<sup>(2)</sup> 黒田祐一編著「宍道町歴史史料（地名編）」によると、この地点の佐々布側に大道という字地があって、このことが証のひとつと考えている。<sup>(3)</sup>

次に駅路の項を見ると、黒田駅から38里で宍道駅にいたるとされている。

風土記には当時あった9郡それぞれに郡記事が書かれている。この記事中の距離記載は、郡家を起点としている。

意宇郡記事をみると、上にみた道度の項や駅路の項と重複する距離記事があるが、宍道郷（郷庁）が郡家の正西37里とある独自記事が貴重である。というのは、これとさきの駅路の項の記事とによって、宍道郷から宍道駅までの間が1里ということが分かるからである。

以上のように、宍道町については距離記載記事は東から西への方向で書かれているが、各地点のなかで、距離測定の基準としてもっとも適當なのは意宇出雲郡境の古代道通過点、いわゆる佐雜崎であると私は考える。川やそこに架された橋は流路の変化によって動き易く、また、役所などの構造物は現在地に直接比定することが困難だからである。

そこで上記の道度記事・駅路記事・意宇郡記事をまとめて、佐雜崎から東へ測っていく。かっこ内は、1里を534.54メートル、1歩を1.78メートルとした換算値である。すると、佐雜崎から4里30歩（約2190メートル）で宍道駅、さらに1里（約530メートル）で宍道郷とということになる。私が推定している古代道ルートにのせてみると、

宍道駅は佐々布地内の字藏敷、宍道郷は宍道地内のJR宍道駅構内の西端付近（図1のO地点）となる。

古代道の宍道地内通過点のうち、こうしてJR宍道駅構内西端、あるいは要害山公園入口東地点といつてもよいが、このところが確実なところとなってくる。このところは南からくる要害山尾根の先端で、また北にはすぐ宍道湖湖岸が迫っているところで、古代道はここを通るほかなかったとも考えられる。

### 3. 宍道地内の古代道候補ルートの検討

前回の小論ではこの地点から東へ地形図上で考察して推定ルートを引いたが、その場合地形に加えて、宍道中学校南方にある塩治高貞墓や付近の字名に高貞とあることなども考慮した。<sup>(4)</sup>

しかし、宍道郷北比定地点から東への進路は地形上他にいくつかが考えられる。

まず、宍道郷北比定地点からJR山陰線添いに東北進するルートがある。JR宍道駅駅舎前には字土井というところがある（図1のQ地点）。土井は、あるクラスの領主の屋敷跡であったかも知れない。駅構内の東部分には字月貫がある。これは「げっかん」と読むと前掲「宍道町歴史史料集（地名編）」にあるが、これは「つきぬけ」で、南からちたれ岩鼻（図1参照）へ連続していた尾根をいつのころか切り削って東西に抜いたところからの地名であろう。このところをまっすぐに進むと湖岸に出るが、そのところに字一里塚というところがある。ここは近世道が湖岸に沿って通っていたところである。<sup>(5)</sup> このルートは、古代道のルートとして可能性をもってはいるが、JR山陰線関連施設や町場の発展によって地形が著しく変わっており、古代道遺構は検出すべくもない。

次に、宍道郷北比定地点から雲松寺のある尾根に上り、尾根上をJR山陰線に並行して東進し、

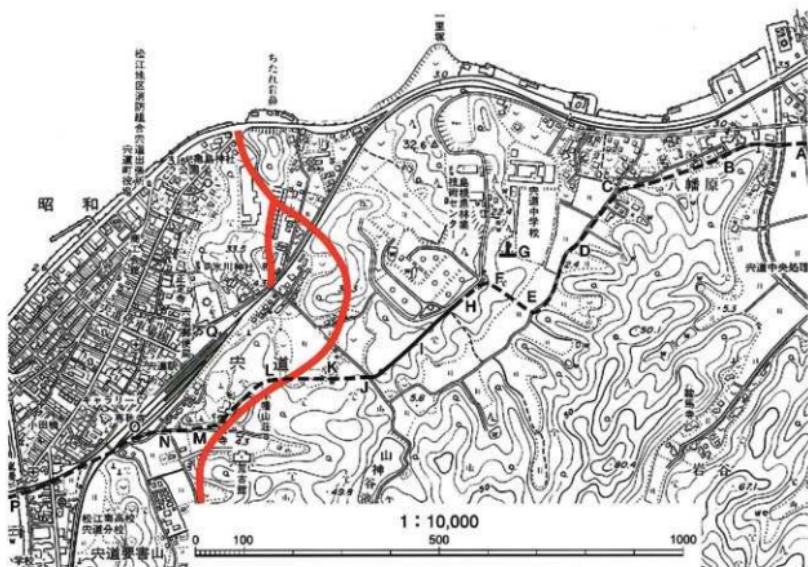


図1 宍道町穴道地区的推定古代山陰道ルート（黒の実線破線）原図は穴道町発行「宍道町全図」（1万分の1）。  
これに「宍道町都市計画道路計画図」から計画路線（赤い太線）を転写した。



図2 「宍道町村繪図」部分（推定明治8~9年作成・宍道町蔵）原図は南を上にしているが、北を上に引用した。

さきの字月貫の南へ下り、字縄手下を横切って字能登堀で丘陵を島根県林業技術センターの南方へ上っていくルートが考えられる。<sup>(6)</sup>しかし、私はこのルートは放棄した。なぜなら、尾根上に古代道の遺構と思えるところを見出せなかつた。

残るのは、前の小論で図示した推定ルートである。

宍道郷庁比定地点から雲松寺丘陵の南の裾を東進する。ここに幅4~5メートルの段丘状の地形を認めることができる。赤道（<sup>あかみち</sup>公道）であることが両側の茶の樹で示されている。ついで、隨音寺池の西側の縁をたどる。道遺構は左側の部分しか残されていなく、右側は池面となっているが、左側の縁には茶樹の列が認められる。

古代道が私の推定ルートをたどっていたとすると、この池の東のところ（図1のL点）で新しく建設される道路とクロスするはずである。稻田氏もそのことを考慮に入れられ・平成14年7月このところすなわち、宇宮ノ後と字上野原の境界にトレントを掘削して調査された。<sup>(7)</sup>それがあとの写真の7と8に示されている。7は西からみたもの、8は東からみたものである。7ではトレントの左方に黒い土層が見え、8では、最上部に植物の腐植土と思われる暗褐色の薄い土層があり、その下にやや明るい土層、さらに下に疊を含んだ褐色の土層が見えている。2番目と3番目の土層は人工によって構築されたように見える。稻田氏と私は慎重に検討したが、これが古代道遺構であるとはそのとき確認できなかつた。

といふのは、この時点、すなわち平成14年7~9月には、ここから東の部分の古代遺構の存在を確認していなかつた。踏査しなければならないと考えながら時間を見出せなかつた。<sup>(8)</sup>

今年平成15年の3月11日になって図1のI地点を中心とした前後で幅3~4メートルの古代道遺構を見付けることができた。図1ではその部分を

実線で示している。写真の5は、I地点で東から西に向かって撮影したものである。

こうして、前の小論を書いて以来の長い間宿題としていた宍道地内の古代道ルートがほぼ明らかになつた。

写真の7と8のトレントはやはり古代道の構築に関する何かを示したものではなかつたかと改めて思う。（実は、この部分の上方にも同方向に並行してもう1本のトレントが掘削されたが、この方にば変わった状況は発見できなかつた。）稻田氏がこの地点に調査の焦点をあてられたことに、改めて敬服している。

#### 4. 東から辿る宍道地内の古代道ルート

さきにみたように風土記の古代道記事は東から西へ記述されているが、私もまたこれまで古代道に関する諸報告はそのように東から西へと記述し、写真もまたとくに断らないかぎりそのように撮してきた。

ここで改めて宍道地内の古代道を東から辿っておきたい。

始点を図1のA点の同道川の渡河点としたい。写真1に示す同道橋2号が架されている地点は、近世道の通過地点であるが、周囲の地形から考えて古代道の通過地点でもあったと考えたい。図1のBの部分は現在の道路とずれるが、古代道はまっすぐ走ってC点にいたつものと考えたい。

写真2は、D点から西方を見たものである。正面に見える宇治台廻の竹林の右に塩冶高貞の墓（図1のG地点・写真3）があるが、周辺に古代道の遺構と覺しきものは見当たらず、古代道はそのまま進んでEを通りFを上り、写真2の竹林の背後に進んでいたと考えられる。Eは縄手と呼ばれる。そして、Fのところには写真4のような土手状の地形が残っている。これは明らかに人工の構築物で版築によって築かれた道の名残りかと思



写真1 同道橋2号 (2003. 3. 23撮影)



写真2 西宇台廻の竹林 中景は穴道中学校のグランド南端部 (2003. 3. 23撮影)



写真3 塩冶高貞墓 (2003. 3. 23撮影)



写真4 西宇台廻の古道跡 (2003. 3. 23撮影)



写真5 岩穴口・能登堀間の丘陵に残る古道跡 (2003. 3. 23撮影)



写真6 北からみる上野原丘陵 左が打越の切り通し、右中景は工事中の穴道中央線の道路 (2003. 3. 21撮影)

われるが、詳しい調査をしていないので、問題提起ということにしておきたい。

道は登りつめたところで左（西）に折れて直進する。H点には、さきの図2にも出ているが無縁墓地があり。北海道出身で、穴道で死亡した岡田某（1886～1909）の墓が残っている。

このところから西へ約300メートルの間、さきに述べたように古代道の遺構と考えてよい道跡が

続いている。図のIを中心とした部分で、写真5に示している。こうした形であるから正確な幅はトレンチ掘削調査しないかぎり測定できないが、ほぼ3.5～4.0メートルと推定される。

古代道は、J地点で断ち切られている。ここは字打越うちこせと呼ばれ、切り通しになっている。写真6は、これを北方からみたところであるが、古代道は、切り割りを越え、写真に見える民家の後方を



写真7 随音寺池の東から上野原を経て東方に能登堀丘陵を望む。手前は調査用に掘られたトレンチ（2002. 8. 8撮影）



写真8 随音寺池の東のトレンチ（2002. 9. 4撮影）



写真9 随音寺池 水面は伐採された竹でかくれて見えない。右側が“赤道”。左遠方は池の築堤、見えないが、その向うは菟古館駐車場（2002. 12. 13撮影）



写真10 随音寺池築堤から西方を見る。右の丘陵の上は雲松寺、左遠方は要害山の北端（2002. 9. 4撮影）

通り丘陵の裾を通り、築造中の市道中央線の後方を右へ走っていたと考えられる。道跡は、図2では赤道として示され、現在茶樹でその道すじを追うことができる。写真7は、さきにも見たが、古代道は遠方右の民家の右から、少々左に出っぽってこのトレンチのところに来ているわけである。図1のKのところである。

また東から西に向けて道をたどる。L地点の写真8についてはさきにふれた。写真9は、随音寺池を望むもので、中景にわずかに水面が見え、築堤もみえている。古代道はこの池の右側を向こう

へ進んでいたと考えられる。

写真10は、図のM地点からN地点O地点を望んだもので、手前が随音寺池の堤防、中景がさきにふれた雲松寺丘陵南ふもとのテラスである。写真には示されていないが、古代道は、このあと図1のP地点を経て、佐々布地内へ入っていくわけである。

以上、私の推定する穴道地内の古代道の推定ルートを辿ったが、I地点付近は古代道の遺構そのものと考えている。

## おわりに

反省するところがある。

L地点の古代道と新設穴道中央線のクロスするところについて、工事開始前の段階でもう少し注意すればよかったと考えている。稻田氏は、ここに2本のトレーナーを掘削され、そのうち写真の7と8に掲げたトレーナーでは、同氏と私は、異なった地層が重なっており、それが人工によるものだとまでは考えたが、さらに検討を深めてはいかなかった。これは、この時点でまだ私が、東方丘陵上の、つまりI地点付近の古代道構を見つけるにいたらず、従ってここのL地点が古代道と新設道路のクロス点であることをしっかりと認識しなかったことによる。

この小論で指摘したF地点の土手状の遺構とI地点付近の古代道構について、町内の皆さんがあくまで検分をされ、ご意見を寄せていただければさいわいに思う。

いうまでもないことであるが、将来私が述べた古代道ルートにかかる建設事業などが行われる場合には、今回示されたと同様の町教委の心配りがいただけるようお願いして、この小論を閉じたい。

(4) 前回の小論に、塩冶高貞にかかる「太平記」巻二の記事を説明しているので、ここでは略する。

(5)・(6)・(7) 上掲「穴道町歴史史料集(地理編)」36~37ページ。

(8) 平成14年度後半期は、県教委の委嘱による石見銀山の街道調査が忙しく、それがチームでの仕事となっていたので、そちらを優先せざるを得なかつた。

## 追記

筆者は、前回の小論「穴道町西部の古代山陰道をめぐって」の9ページ14行以下で、

「筆者は、1~2メートル解釈と反対に、古代官道はいつどこでも6メートル以上あると解釈する研究者もあるようである。」

としているが、意味不明であり、これを

「筆者は、古代山陰道の道幅について、1~2メートル解釈と反対に、古代官道はいつどこでも6メートル以上あると解釈する研究者もあるようであるが、そのどちらにも不同意である。」

と語句を追加して訂正したいので、この機会にこのことをお許しいただきたい。

(2003年3月31日)

## 注

(1) 「穴道町歴史叢書2・歴史の道研究(1)、1998年3月」

所取前掲論文の2~3ページに、図1として、佐々布地内を中心に東の穴道町地内と西の伊志見地内の古代道についてその推定ルートを2万5000分の1地形図に示しているので、参照されたい。

(2) 上掲の小論2~3ページの図1に郡境付近の古代道ルートを示している。

(3) 黒田祐一編著「穴道町歴史史料集(地名編)」(穴道町教育委員会・1995年)、61ページ。なお、これは図2に掲げた「出雲国意宇郡穴道町村絵図」をもとに縮まれたものである。

# 地名配置から見た佐々布川河口部の居館と山城

山根正明

## はじめに

宍道町における中世城館の調査は、鳥取県内の他町村に比して深化されているといつてよい。それはまず『宍道町ふるさと文庫5 宍道町の山城』(1991刊)から始まり、『宍道町史 資料編』(1999刊)の編纂過程と「鳥取県城館跡分布調査事業」において進められた、柵張り調査によるところが大きい。また遺構そのものは破壊されたものの、山陰自動車道と中国横断自動車道の建設とともに発掘調査も、中世山城の所在と構造に関する考古学的な知見を拡大するうえで大きく貢献している。

ただ、山城に対して居館に関する知見はいたって少ない。他地域と同様で遺構が残りにくいからにはかならないが、手がかりとする資料がないことはない。それがいわゆる城館地名の残存である。

地名を資料とする城館調査に関しても、宍道町においては、かつての地籍団は廃棄されているものの町教育委員会に地籍団の写し<sup>(1)</sup>が保存されており、有力な手がかりが残されているといえる。したがって、これを握りどころとしながら、従来の知見<sup>(2)</sup>に今回の発掘調査の成果を加えて、あらためて佐々布川河口部の城館像を推定復元してみたい。

なお紙幅の制約から、柵張り図は一切掲載しないこととした。手近には『宍道町史 資料編』「城館遺跡」を参照されたい。

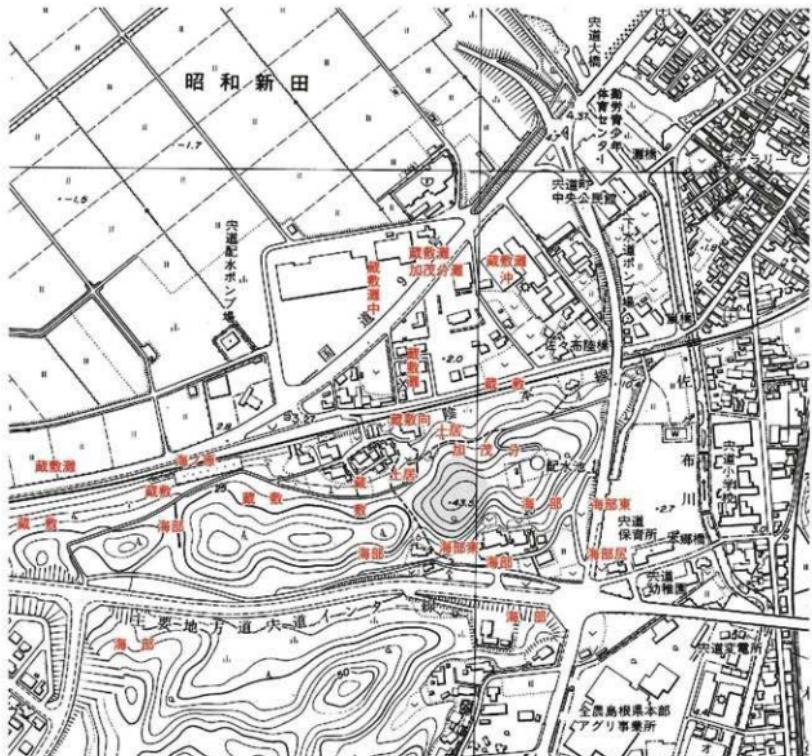
## 1 掛屋山城と藏敷の字「土居」

佐々布川河口部における既知の城館としては、まず掛屋山城があげられる。当城は、佐々布川河

口部の左岸に向かって西方からつき出した、宍道湖岸に平行して伸びる丘陵の頂部に地取りしている。ただこの丘陵は低平で、地形の陥しさに依存した柵張りは不可能である。そのため、主郭(標高41.5メートル 比高30メートル)の西側で海部の集落への通路に向かう斜面と、北側の旧山陰道に向かって下る斜面、および東側の緩斜面の三方向にそれぞれ堀切りを掘って城域を区画している。また主郭の海部の集落にみける山道の方向に對しては上墨を塗いている。したがって虎口のない点を除けば、柵張りの巧妙さは認められるところである。ただ、腰郭の削平は甘く堀切りも浅く、普請の程度はいかにも簡略で、多くの人力を投入したようには思われない。

このような柵張りと普請から見ると、雲芸攻防戦あるいは尼子家復興戦の時期における当城の機能については、旧山陰道を押さえて宍道地域を守る任務を担った小規模な境目の城と推定するのが妥当であろう。それは、この地点が現斐川町莊原あたりから湖岸沿いに陸路で宍道地内に侵入しようとする場合の、最後の関門となっているからである。したがって、当城の築城(あるいは改修)者は宍道地域に駐屯した毛利系の武将と考えられる。

ただかつて推定した<sup>(3)</sup>ように、当城は藏敷集落内にあった土居の主の築いた詰めの城の可能性も捨て切れない。つまり、佐々布下の藏敷集落は湖岸に平行して伸びる丘陵の裾の段丘上(標高10~15メートル程度)に立地しているが、その段丘上の傾斜地に字「土居」が確認できる。ただ現況は畠地であって、居館の跡と思われるような景観



が残されているわけではない。

そもそも「土居（土井とも）」とは、在地領主の防御性をもった居館（居屋敷とも）を意味する用語で、有力名主の館から国人級領主のそれにまで広く用いられている。また地名として残る場合には、一定の期間、その所領支配の中心として構えられた場合もあれば、陣城として短期間駐屯しただけの場合にも命名され記憶されることがある。したがって、詰めの城という推定が蓋然性を高めるためには、藏敷集落に土居（居屋敷）を構えた領主の性格を推測する作業が必要となる。今のところ説得的な根拠をあげることはできないが、河口部の他の類例を検討したうえであらため

て考えることしたい。

## 2 宍道要害山城と北端の字「戸井元」

宍道要害山城は、佐々布川にそって北に伸び、佐為川によって東側を削られた舌状丘陵の先端に地取りしている。佐為川はこの丘陵の先端を包むようにカーブし、山陰線の路床の下をくぐって流れ、佐々布川とその川口直前で合流している。山陰線と木次線がこの丘陵の尖端部で分岐しているので、路床として土盛りがされたために路床の標高は3.8メートルから3.6メートル<sup>(4)</sup>あるが、分岐点に挟まれた水田は1.8メートル以下でしかない。分岐点の西側で佐々布川に続く地点には「舟場」



という字名が残されており、2.8メートルから1.2メートル程度の標高である。こうした地形と、「舟場」の北側の宍道町の市街地に「中津上手側」・「中津灘側」・「北津上手側」・「北津灘側」等の字名が残されていることを考えあわせる

と、かつて宍道湖の汀線は宍道要害山城の西側になりまで湾入していたと考えてよからう。

当城は、東西約20メートル南北24メートルを測る主郭が標高42.1メートル（比高37メートル）の地点に設けられているが、主郭は忠魂碑を建てるにあたって削られ、そのために南西隅の古墳の横穴式石室が露頭してしまったそうであり、北側の郭も児童公園にするために削平されたといわれるから、本来もう少し狭くて標高も高く平坦でもなかつたと考えてよい。ただ主郭からの眺望は広く、北北西の方向にあたる鶴ヶ巣城（出雲市）から平田城・桧ヶ山城（平田市）、さらには大野辺りまでの宍道湖北岸を見通すことが可能である。したがって、前述のような地取りと当城の縄張りから推測すると、宍道要害山城は「中津」や「北津」という宍道湖岸の港湾を扼し、湖上の水運を警固する任務を果たしたのであろう。したがって、雲芸攻防戦あるいは尼子家復興戦の時期にあつては、湯原氏の満願寺城（松江市）のような宍道湖における水軍城（海賊城とも）と位置づけることができよう。築城（あるいは改修）者は毛利系の武将、具体的には大内義隆に従つて出雲を離れ毛利元就に臣従して宍道地域に復帰した宍道隆慶の可能性が高い。

ただ当城でも、城城の北西端（雲松寺の側）に「戸井元」という小字地名が残されているのが注目される。城城の北端は、丘陵の裾がY字形に分岐した形で構成されており、字は「西光寺」、地目は畠地と墓地からなっている。字「戸井元」は標高2.3メートルで、地目は田地で佐為川の氾濫原と見られる（隣接して字「大池」・字「上大池」

があることからも推定されよう）から、領主の上居そのものは、字「西光寺」に置かれた可能性が高い。

### 3 雲松寺北麓の字「土井」と字「堀」

雲松寺の境内は、宍道町の市街地つまり「中津上手側」・「中津灘側」・「北津上手側」・「北津灘側」等を見下ろすように北東側から伸びた低平な丘陵のほぼ先端に立地している。当遺跡はこの丘陵のほぼ中央部に、南東側からT字形に連結する尾根筋に位置している。なお丘陵の北東端は字「縄手下」でときて、氷川神社の鎮座する丘陵と対峙している。

この北東側から伸びた低平な丘陵のほぼ中央部の北側、つまり当遺跡と対称的な位置に字「土井」が認められる。土地自体は鉄道用地とされており、宍道駅の駅舎とその東方で、現在は駐車場となつていて地点がほぼ中心である。雲松寺ののる丘陵の先端を南側背後にひかえ、東側の氷川神社の丘陵とにはさまれた西方に向かって緩やかに傾斜している。

字「堀」はこの「土井」の西側に接している。したがって、居館の防御のために堀を掘り、そのかき揚げた土で土壘（土居）めぐらせるという典型的な土居構えを推定することができる。

加えて、字「土井」の南側に接して字「馬場屋敷」が確認できる。騎馬の調練のために、居館の周辺に馬場が設けられるという配置も広く認められるところである。また「土井」の西側に接する字「輪之内」にも注目されよう。「輪之内」は恐らく「曲輪之内」の転訛であろうから<sup>⑤</sup>である。「曲輪（郭とも）」が重要な城館用語の一つであることはいうまでもない。

現況では、「馬場屋敷」も「輪之内」もほとんど宍道駅の構内にかかり、「堀」も一段と低まつて堀の痕跡がうかがえるというような状況にはな

い。山陰線の敷設と宍道駅の建設によって土地のかさ上げが行われたよう、原景観の標高は、現況よりもやや低いものと考えられる。しかし、現況からは全くうかがい知ることはできないものの、前記のような地名配置からすると、雲松寺の北麓には、まわりに堀をめぐらし、隣接して馬場を設けた領主の居館が存在したとの推定は大方の賛同を得られると思う。

ただ、「輪之内」という字名は、雲松寺北麓の「土井」の約200メートル北東方向にもう一ヵ所確認できる。この「輪之内」の南には、隣接して字「堀」・字「輪之内廻」がある。現況では、東・南・西の三方を山林によって取り囲まれ、北西方も氷川神社ののる丘陵によってふさがれ、わずかに北東方向に狭い口を開いた袋状の水田である。そして小規模な溜め池を水源として耕作されている。「輪之内」は、前述のように一般には曲輪ノ内を意味する城館用語の一つであるが、ここでは文字どおりリングのように三方を丘陵に囲まれた耕地を指している。

距離が離れていることから、この「輪之内」を雲松寺北麓の「土井」と結びつけて考えるにはためらいもあったが、当遺跡の調査によって、あながち無縁のものとは考えられなくなったと思う。つまり雲松寺の境内とされた丘陵が、その北麓の「土井」の領主の詰城の機能を果たしており、その城域は丘陵の南側の裾にまで及んでいたと推定できよう。

### 結びとして

佐々布川河口部の二か所の山城と三か所の土居について検討してきた。普請の跡が明瞭なのはいうまでもなく宍道要害山城であり、山城としての要害性も高い。ただそれは、大内氏に統いて毛利氏に従って転戦するなかで学んだ築城技法を駆使して普請が施された結果であろう。つまり、その

北端に土居を構えていた領主の普請した詰城が、宍道氏の手によって大改修されたのであろう。掛屋山城についても同様な経過をたどったと思われる。つまり、藏敷に土居を構えた領主の詰城が、その地理的な好位置から接收されて、進んだ繩張り觀のもとに改修されたと見てよい。

さらに両者に共通するのは、眼前に低湿地が広がっていたらしいことである。宍道要害山城膝下の「戸元」の場合は、佐々布川に佐為川が南東から注ぎ込むことによって、合流点とその周辺はかなりの範囲で、つまり字「大池」や字「上大池」を含む地点までが氾濫原だったと見られる。藏敷の「土居」の場合だと眼下に宍道湖の湖岸が広がっていた。こうした景観を想定すると、両者ともに低湿地開拓の意欲をもった有力名主の土居を彷彿させるものがある。

前二者に対し、雲松寺の境内とされた丘陵には、繩張り調査の方法つまり表面観察によっては山城としての普請の跡は確認できない。墓地として利用されている加工段にはその痕跡らしく見えるものもあるが、余りにも改変が大きくて郭の切岸と断定するにはためらいがある。ただ、堀をめぐらせ馬場を備えたその北麓の土居の景観は、他の二か所と比べてより有力な領主の居館の姿を浮かび上がらせるものであろう。

注1 この写しは、筆写の時期が不明であること、地目が記入されていないこと、道路・水路などが着色されていないことなど、資料とするには弱点はあるもののまたとない有力な手がかりと言える。なお宍道地区に関しては、明治8~9年の作成と推定される「出雲国意宇郡第十四区宍道町村絵図」(いわゆる地租改正地図)が利用できる。

現在、これらの資料を基礎として地区ごとの協

- 力員による調査成果をまとめて図化した『宍道町歴史史料集（地名編）』（黒田祐一編著 1995刊）が宍道町教育委員会より刊行されており、手軽に利用することができるようになっている。
- 注2 抽稿「宍道の中世城館について」科研成果報告書『尼子氏の総合的研究』（1992刊）所収・島根県教育委員会『出雲・隠岐の城館跡』（1998刊）・抽稿「普請未成の山城について』『同』所収・「城館遺跡」「宍道町史 資料編』（1999刊）所収など
- 注3 前掲抽稿（1992刊）および「城館遺跡」（1999刊）の該当項目
- 注4 以下、標高については「宍道町道路台帳図」500分の1による。
- 注5 「輪」については別の視覚からの検討も必要である。松江藩においては、村内の地味がほぼ同じ耕地群をまとめて、地名を冠して「○○輪」と呼んだからである。ただ宍道町ではこの型の小字は確認されていない。

# 穴道町岩屋寺の石造物（1）

間野大丞

## 1.はじめに

穴道町上来寺に所在する真言宗美濃山岩屋寺には宝篋印塔、五輪塔をはじめとする多数の石造物が存在している。これら石造物に関する既往の研究としては、今岡稔、今岡利江による報告（今岡1994、今岡2002）のほか、筆者による文禄年間の紀年銘を有する宝篋印塔の紹介（間野2000）がある。今回は、文禄年銘の宝篋印塔と同じ石窟内に納められた3基の五輪塔について紹介する。

## 2.概要

石窟は上端幅95cm、下端幅110cm、高さ110cm、奥行き45~70cm。この中に、向かって左から五輪塔3基（図1-1~3）が並び、右端に宝篋印塔が納められている。五輪塔はいずれも組み合せ式。水輪、地輪の側面に剥落が見られるものの、全体に遺存状態は良好である。3基とも梵字は表現

されておらず、銘文も無い。総高は70.8~72.0cmの小型品。各部材の法量も近似し、形態的特徴も共通しており、3基は一定の規格のもと造られたと考えられる。なかでも1・2号は、細部の特徴から同一石工の手による可能性も考えられる。

各部材の計測値（表1）をみると、30cmに満たない切石から加工されたことが考えられる。石窟に納められているため風化しておらず、表面の工具痕等が観察できる。空輪の頂部をはじめ、組み合せた場合に見える外面は、のみで仕上げた後に砥石で研磨している。それに対して、組み合せたときに見えない部分、空風輪のほぞ、火輪のほぞ穴、水輪・地輪の抉り部分には粗いのみ痕を残したままとなっている。

形態的特徴も3基は共通しており、規格性がある。空風輪は長胴形で、空輪と風輪の径はほとんど変わらない。空風輪の境は界線で区画する。



写真1 石窟内の五輪塔、宝篋印塔（左から1~3号塔、右端が文禄年銘宝篋印塔）

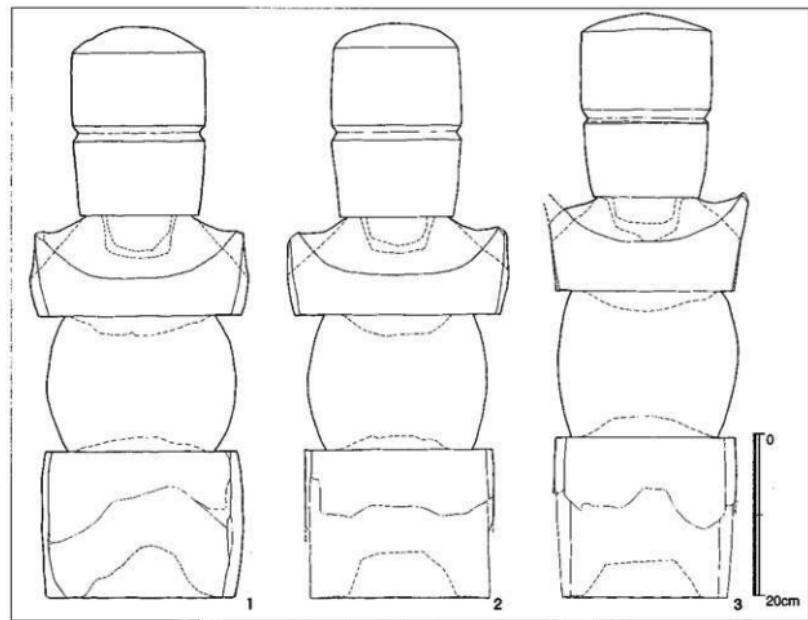


図1 五輪塔実測図 ( $S=1/6$ )

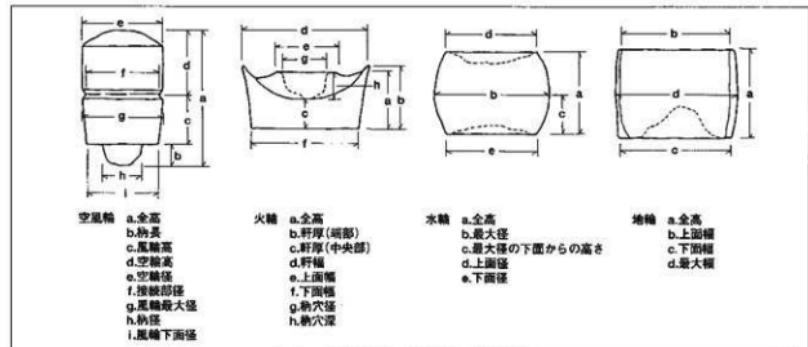


図2 五輪塔の各部名称及び計測地点

表1 五輪塔計測表

単位: cm

名前 総高	部位	a	b	c	d	e	f	g	h	i
1号 70.8	空軸	27.7	4.4	10.3	13.6	16.5	15.0	16.4	8.1	14.6
	火	12.5	10.6	4.8	25.8	13.0	22.4	9.2		5.0
	氷	16.8	11.6	8.4	18.6	18.0				
	地	18.2	23.7	22.8	24.8					
2号 72.0	空軸	27.6	3.6	10.6	13.4	15.9	14.8	16.4	7.9	13.6
	火	12.1	10.9	5.0	26.4	12.6	23.8	9.1	4.4	
	氷	16.7	22.2	8.3	18.6	18.1				
	地	19.2	23.2	22.1	23.2					
3号 71.2	空軸	26.0	3.3	9.3	13.4	16.0	14.6	15.5	8.1	13.1
	火	11.6	12.3	6.1	25.6	12.2	21.4	9.6	5.4	
	氷	18.1	23.0	9.8	18.6	18.4				
	地	18.8	19.6	18.4	20.5					

空輪の頂部は丁寧に研磨して仕上げてあり丸みをもつ。火輪の軒は下端は水平だが、上端が端部に向けて弧を描いて反り上がる。このため軒の厚さは一定ではなく、端部では中央部の約2倍にもなる。3号塔は、この特徴が特に顕著であり、先端は火輪の上面よりも高くなっている。また、1・2号塔は軒の側面も大きく弧を描いて外に張り出すように作られている。水輪は太鼓胴形で、最大径はほぼ中位にある。上下面とも浅く掘り窪める。地輪は1・2号塔は綾長だが、3号塔は立方体に近い。幅に対する高さの比率をみると、1号塔は0.83、2号塔は0.77、3号塔は0.96となる。側面が膨らみ、下面には彫り込みが見られる点は共通している。

これらの所産年代は、石窟を五輪塔と文禄年間(1592~1595年)銘の宝篋印塔がちょうど一緒に納まるよう造っていることから、4基は同時に、すなわち16世紀末頃に造立した蓋然性が極めて高いものと推察される。

### 3. おわりに

小稿では岩屋寺に所在する石造物のうち、石窟内に納められた五輪塔3基について紹介した。本資料は文禄年銘宝篋印塔とともに当該期の来待石製品の型式を知ることができ、かつ風化剥落しやすい来待石製品にあって製作方法も観察できる貴重な一群である。今後、岩屋寺石造物をはじめとする来待石製品の詳細な調査研究を進める基準資料になるものと考えられる。

### (参考文献)

- 今岡稔「山陰の石塔二三について-3-」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会1994  
 今岡稔・今岡利江「山陰の石塔二三について-10-」『島根考古学会誌』第19集 島根考古学会2002  
 間野大承「宍道町岩屋寺所在の紀年銘のある宝篋印塔について」『来待ストーン研究3』モニュメント・ミュージアム来待ストーン2000

# 雲松寺山（猪道山）城跡南支郭群発掘調査報告

宍道町教育委員会

## 調査に至る経緯と調査の経過

宍道中央線の建設は国道54号線と国道9号線を結び、また宍道インターチェンジと接続してネットワークを形成することにより沿岸地域の住環境整備、産業振興、地域経済の発展と活性化を図ることを目的に計画された。

この計画にともない宍道町長（役場建設課）より、平成13年11月に宍道町教育委員会に対して埋蔵文化財の分布調査依頼があり、町教育委員会では同年12月3日に分布調査を実施した。

町教育委員会では、平成13年12月19日にこの調査の結果と調査にかかる概ねの体制、期間を宍道町長（役場建設課）に回答し、併せて調査事業の円滑化を図るために用地買収、立木伐採等環境整備の充実を要望した。分布調査により道路建設予定地内からは周知の遺跡である上野原遺跡、能登堀遺跡が所在し、周知の遺跡ではなかったが人為的な加工段が確認されている。

平成14年5月20日に宍道長町より宍道長教育委員会宛に埋蔵文化財発掘調査依頼を受け、同年7月に発掘調査は用地買収の終了を待って同年8月20日より開始した。調査終了は同年12月26日である。

分布調査で確認したものは宍道町大字宍道に所在する上野原遺跡、能登堀遺跡であるが、調査の結果、能登堀遺跡は後世の客土に偶然須恵器片が含まれていたため遺跡として認定していたことが判明した。また、分布調査で確認された加工段はトレンチ調査で山城であることが判明したことから、雲松寺山（山）城南支郭群と名づけ調査範囲を広げた。本書では雲松寺山（猪道山）城南支郭



図1 雲松寺山城周辺の山城

1. 雲松寺山城
2. 宍道要害山城
3. 拂屋山城
4. 海部城
5. 舞屋城
6. 土居郭群
7. 上野城
8. 佐々布要害山金山城
9. (坂口) 要害山城

群の調査報告をおこなうもので、上野原遺跡もこの山城の一角として併せて紹介する。

## 調査地の位置と歴史的環境

雲松寺山（猪道山）城跡は、島根県八束郡宍道町大字宍道にあり、曹洞宗雲松寺が位置する丘陵を中心に形成されており、今回調査した南支郭群のように周囲の丘陵にも派生している。

雲松寺山というは曹洞宗海運山雲松寺がある丘陵であることから呼ばれる通称で、小字では丘陵に猪道山、伊勢山、寺の前、宮ノ後、上野原などが残り、山城名としては雲松寺山（猪道山）城とした。また、丘陵の周囲には輪之内、輪之内廻、土井などの中世城郭の存在を補強する地名が残る。また、山頂には「成田の松」と呼ばれる松の巨木があり、舟運の目印になったこと、さらには「成田荒神」と呼ばれる塚がかつては存在したことが伝えられている。

さて、宍道地域の大半は山林で、宍道湖に面した地域から南に向かうにしたがって標高が高くなり、現在の大東町境には標高300～400mの山が並ぶ。佐々布川、来待川、同道川などが宍道湖に向かってほぼ南北に流れ、その流域にそって谷平野がいくつも形成されることにより、遺跡の分布もこの地理的特徴に規定されている。そして、旧石器時代、繩文時代、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺跡も多く知られる。

中世になると人々の生活の跡は文献や字名、山城等の遺跡より類推することができる。中世の宍道地域には来海荘、宍道郷、佐々布郷、伊志見郷という1莊3郷が並ぶように存在しており、独自の空間領域と歴史を刻んでいった。宍道郷、佐々布郷は古代には宍道郷（宍道駅を含む）と呼ばれていた佐々布川流域の地域が発展したものである。文永8年（1271）の関東下知状案（『宍道町史史料編』古代・中世48）によると宍道郷に成田某、佐々布郷に佐々布左衛門入道子と記されており、宍道郷には承久の乱後に新補地頭としての東国御家人・成田氏があり、佐々布郷には古くから

の在地領主・佐々布氏がいたことが知られる。その後も佐々布氏は佐々布郷での勢力を保つが、宍道郷は正平7年（1352）に南朝方の足利直冬によって宍道南方が没収され（『史料編』古代・中世65）、永享2年（1430）の杵築大社三月会一番饗神物引付（『史料編』古代・中世70）によると出雲国守護京極氏の一族、宍道氏が成田氏に代わって宍道郷を知行していたことが知られる。

宍道氏は出雲国守護京極高秀の子息秀益を初代とする佐々木京極氏の一族で、宍道郷を獲得し、ここに拠点を構えたところから地名をとって宍道氏を名乗ったものである。宍道氏の動向は残された数少ない文献より徐々に明らかになりつつあり、尼子氏の「一族衆」としての地位を保って活躍するが、その実態についてはまだ不明な点が多い。その中で、宍道隆慶（久慶）、宍道政慶親子の活躍は戦国期の激動を示すとともに、今も残る山城等の城郭形成にも大きくかかわったと思われる。

天文11年（1542）、宍道隆慶は尼子氏と袂を分かってからの大内義隆の尼子攻めに参加する。しかし、尼子攻めの失敗により隆慶（久慶）、政慶親子は大内氏に従い、やがて毛利氏方の武将として永禄5年（1562）、毛利氏の尼子攻めに従い、旧領地を安堵される。親子は毛利氏方の武将として、家臣団の再編成を行うとともに、かつては独立した所領であった来海荘・宍道郷・佐々布郷を一円的に支配しつつ周辺部にも勢力を拡大する。また、金山（坂口）要害山城の整備・拡充に併せ、周辺を支城とする城郭群の再構築、再編成をおこなったと考えられている。

現在、宍道地域には数多くの山城が確認されている。金山（坂口）要害山城跡、佐々布要害山城跡、宍道要害山城跡、城山城跡など、一部の山城については城跡としての記憶が伝承されたり、また城山城跡や勝負廻城跡、海都城跡のように発掘

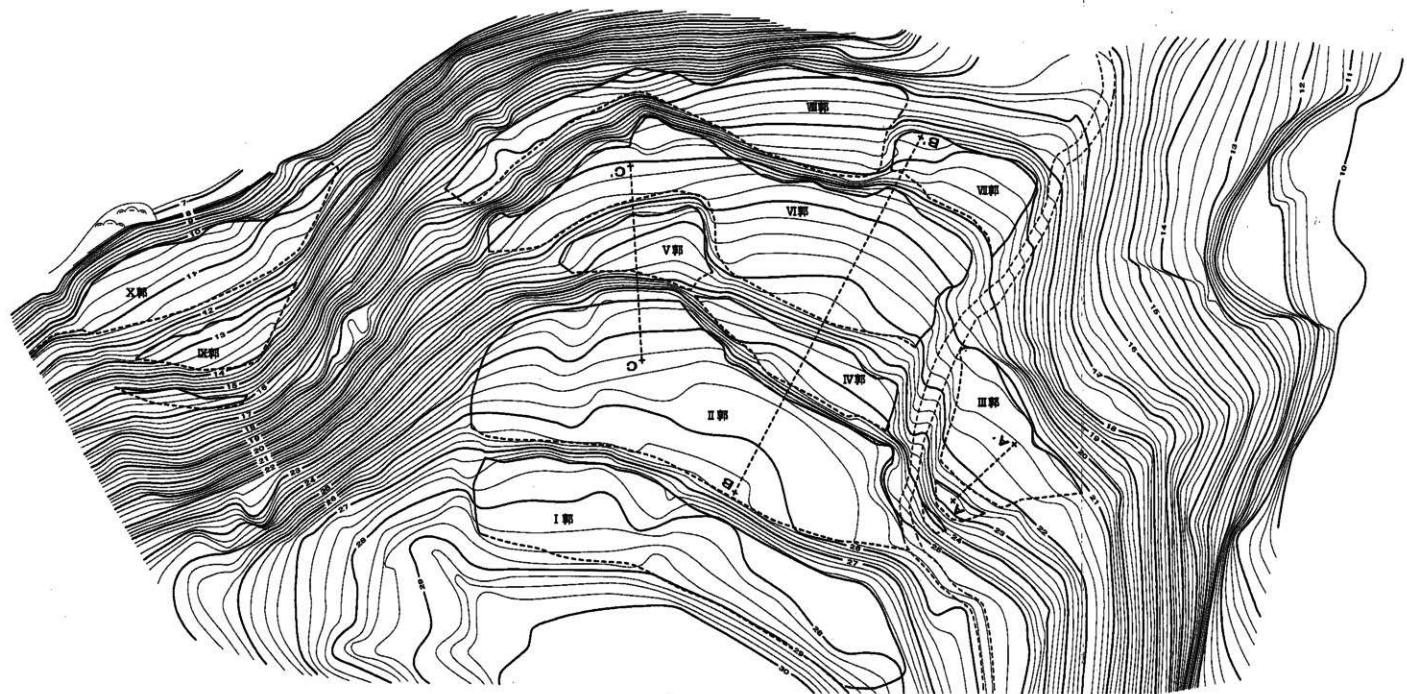


図2 雲松寺山(猪道山)城南志郭群平面図 S=1:300

0 30m

調査により遺構の一部が明らかになったものもあるが、文献史料に基づく具体的な築造時期、築造者等は不明であり、戦国期の情勢や成田氏や宍道氏の動向の中でからうじてその性格を理解することができるるのである。

雲松寺山城は宍道の町部集落の東の守りを果たす位置にあたり、先述のとおり、周辺（南支郭群）の発掘調査と地名・伝承等によりその存在が明らかになったところである。築造時期、築造者、改修の時期等は不明と言わざるを得ないが、想像をたくましくすれば、「成田の松」、「成田荒神」などの伝承や位置的に宍道の町部集落（中世に名称の起源を持つと考えられる中津、北津を含む）を望む立地など、宍道氏が入部する以前に宍道郷を所領とした成田氏とのかかわりを連想できるのはなかろか。

#### 調査の概要

##### 雲松寺山城南支郭群

雲松寺山（猪道山）城南支郭群の調査では工事区域を伐採して平板測量するとともに、郭群と周辺のトレント調査を実施し、郭の一部（VI郭）を調査した。郭の名称は工事範囲として調査をおこなった地点にのみ付し、尾根筋に沿って上方からI郭～X郭の名称を付している。（図2）

**I郭** 尾根の頂部には明確な加工の跡がなく、山城としては防備が不十分であるが、一段下がったI郭は平面形は横長長方形のしっかりした加工が施されている。規模は周囲85m、面積240.2m<sup>2</sup>、尾根筋の方向の長さが6～8m、直交方向が37mである。現在この郭の東側には小径が伸びている。尾根の山側を削りだし、その土を谷側に移動させ切り岸を形成したと考えられる。

**II郭** 平面形はやや幅広の横長長方形でしっかりした加工が施されている。規模は周囲90m、面積344.5m<sup>2</sup>、尾根筋の方向の長さが9～12m、直交

方向が37mである。現在この郭の東側には小径が伸びている。

トレントの土層を観察すると尾根の山側を削りだし、その土を谷側に移動させ切り岸を形成している。山側の土層を観察すると、表土から3～5cmあまりで地山となっており、平坦面として加工を施した後、後世の加工は認められないと考えている。

**III郭** 平面形はやや幅広の台形型の長方形でしっかりした加工が施されている。規模は周囲約38m、面積72.1m<sup>2</sup>、尾根筋の方向の長さが9～12m、直交方向が37mである。現在この郭の東側には小径が伸びている。

トレントの土層を観察すると尾根の山側を削りだし、その上を谷側に移動させ切り岸を形成している。

**IV郭** II郭とVI郭にはさまれた比較的幅細の郭で、平面形はやや幅細の長方形で緩やかに傾斜をもつ。表土からは近世以降の陶磁器が表採できる。規模は周囲約41m、面積58.2m<sup>2</sup>、尾根筋の方向の長さが3～4m、直交方向が18mである。現在この郭の東側には小径が伸びている。

トレントの土層を観察すると尾根の山側を削りだし、その土を谷側に移動させ切り岸を形成している。

**V郭** II郭とVI郭にはさまれた比較的幅細の郭で、IV郭に統いており平面形は三角形である。後世耕地として利用されたのか、緩やかな斜面をもつ。規模は周囲約31m、面積49.2m<sup>2</sup>、尾根筋の方向の長さが約6m、直交方向が約12mである。現在この郭の東側には小径が伸びている。

トレントの土層を観察すると尾根の山側を削りだし、その土を谷側に移動させ切り岸を形成している。山側の土層を観察すると、表土から3～5cmあまりで地山となっており、平坦面として加工を施している。

**V郭** 平面形はV郭を囲むようにやや幅広の横長長方形で、しっかりした加工が施されている。規模は周囲約100m、面積260.6m<sup>2</sup>、尾根筋の方向の長さが約3～12m、直交方向が約38mである。現在この郭の東側には小径が伸びている。

トレンチの土層を観察すると尾根の山側を削りだし、その土を谷側に移動させ切り岸を形成している。後世耕地として利用されており、緩やかな斜面をもつ。

**VI郭** 平面形はやや幅広の横長長方形で他の郭に比べると上段の郭（V郭）との段差はあまりない。規模は周囲約33m、面積56.1m<sup>2</sup>、尾根筋の方向の長さが約4～6m、直交方向が約11mである。現在この郭の東側には小径が伸びている。

トレンチの土層を観察すると尾根の山側を削りだし、その土を谷側に移動させ切り岸を形成している。後世耕地として利用されており、緩やかな斜面をもつ。

**VII郭** 平面形は地形に合わせて加工されており、やや幅細の帯状で、しっかりした加工が施されている。規模は周囲87m、面積151.0m<sup>2</sup>、尾根筋の方向の長さが9～12m、直交方向が37mである。現在この郭の東側には小径が伸びている。

トレンチの土層を観察すると尾根の山側を削りだし、その土を谷側に移動させ切り岸を形成している。後世耕地として利用されており、緩やかな斜面をもつ。

**VIII郭** 平面形は地形に合わせて加工されており、三日月型である。規模は周囲約31m、面積34.3m<sup>2</sup>、斜面の方向の長さが約4m、直交方向が約14mである。

**X郭** 平面形は地形に合わせて加工されており、幅細の長方形である。規模は周囲約54m、面積97.6m<sup>2</sup>、斜面の方向の長さが約3～5m、直交方向が約24mである。

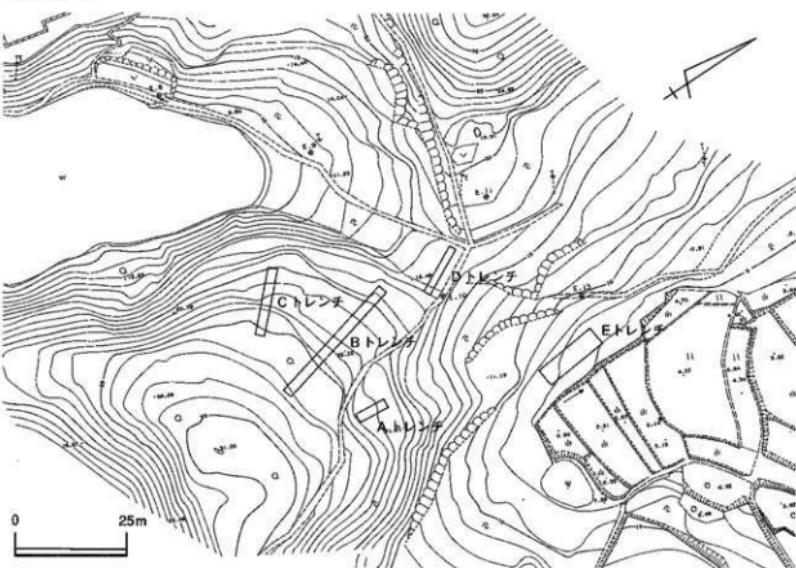


図3 雪松寺山城トレンチ配置図

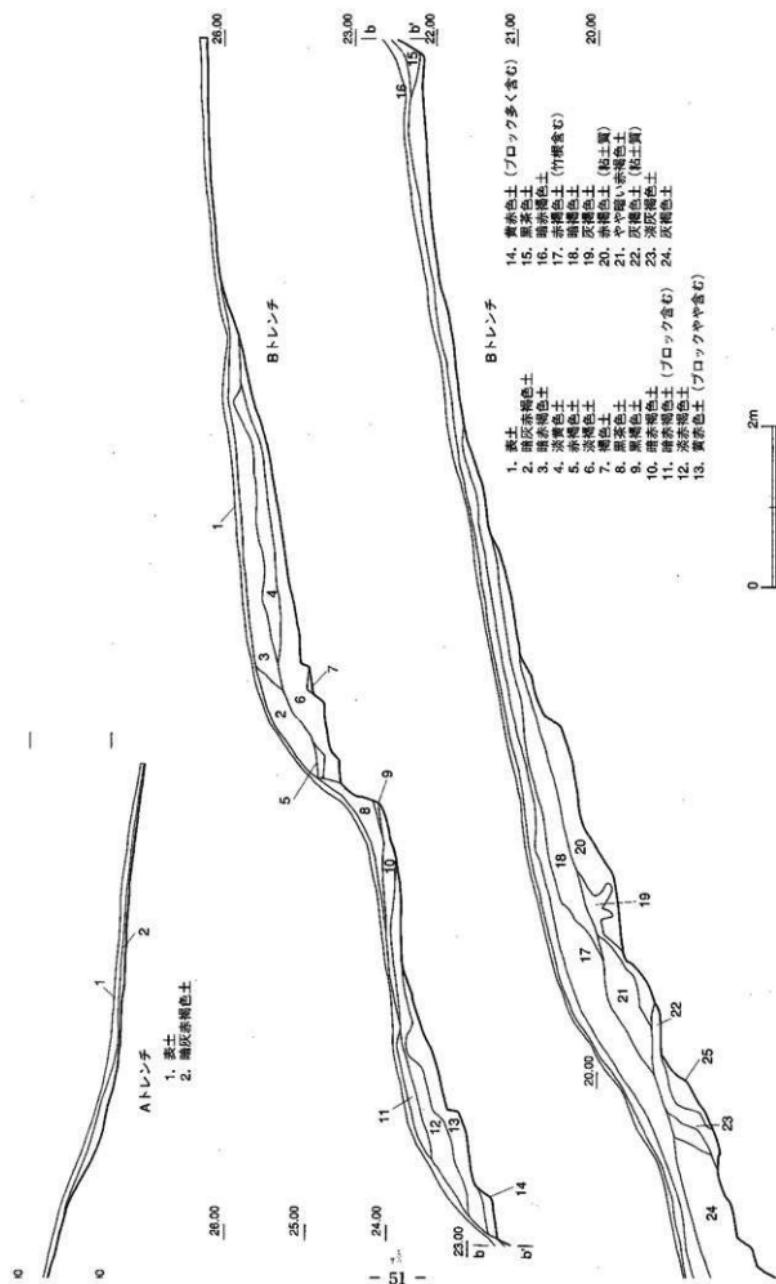


図4 霊松寺山城A、B、トレーニチ土層断面図

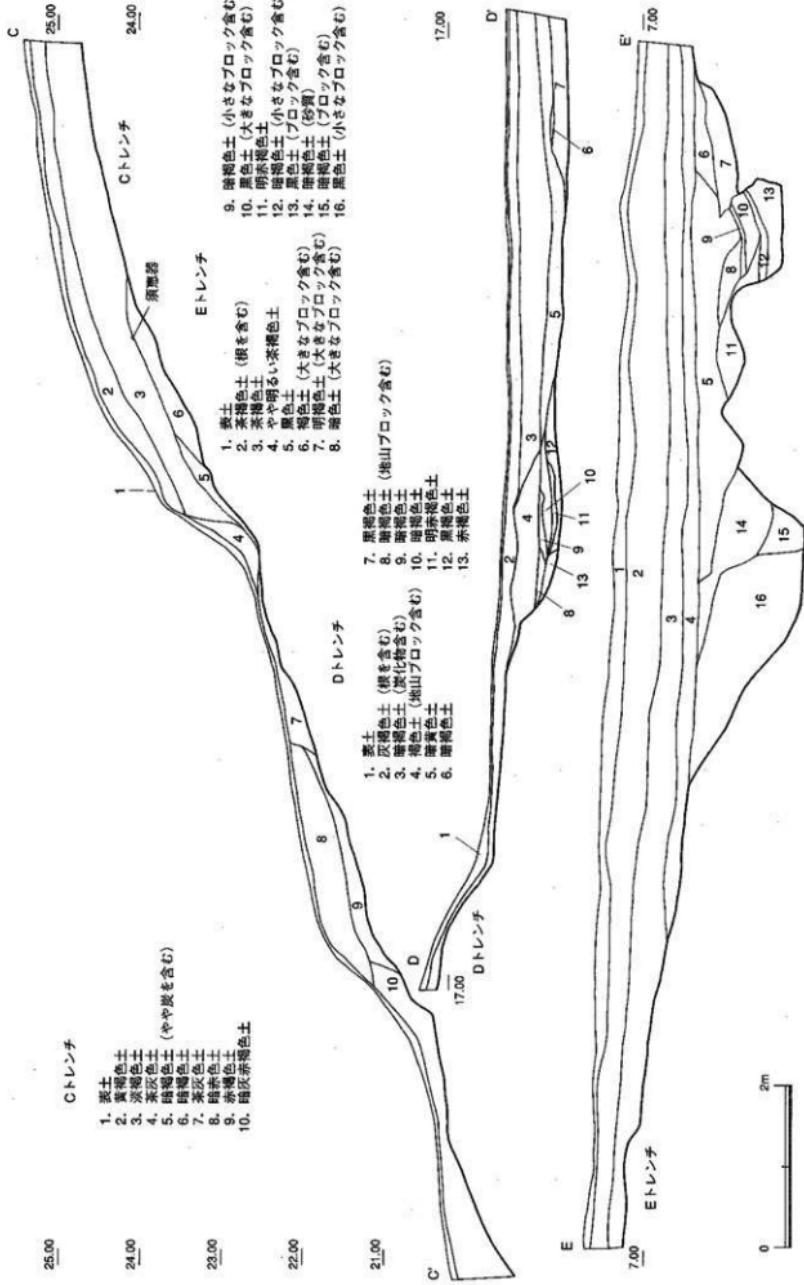


図5 雪松寺山城C、D、E（上野原遺跡）トレーナー層断面図

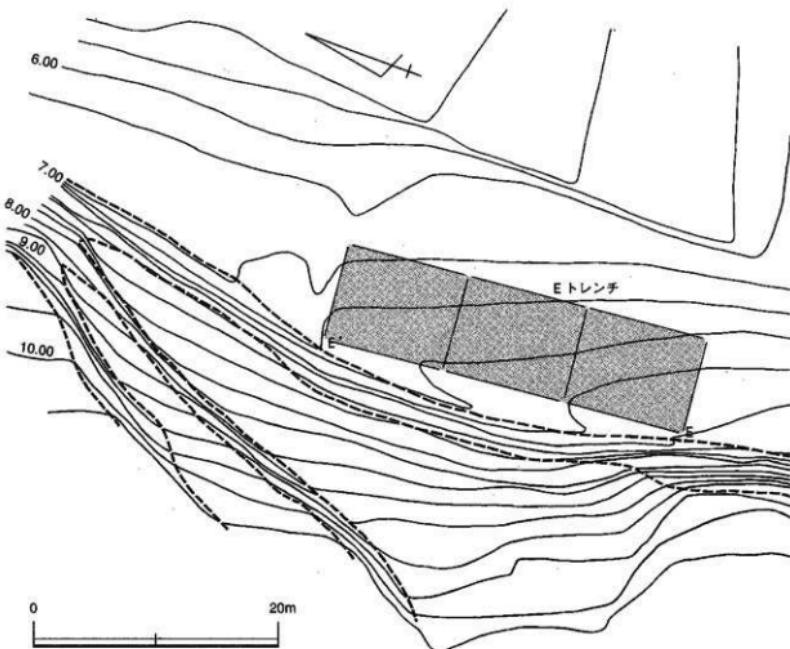


図6 E トレンチ・周辺地図

#### 遺構と遺物

##### A トレンチ（図4）

Ⅲ郭内に設定したトレンチで、長さ6.6mである。土層を観察する限り、表土から地山まで概ね20cm以内で、Ⅲ郭は斜面を削りだして形成したと考えられる。遺構、遺物は検出できなかった。

##### B トレンチ（図4）

Ⅱ郭→Ⅳ郭→Ⅵ郭→Ⅶ郭にかけて設定したトレンチで、長さ31.8mである。土層を観察すると、Ⅱ郭はⅠ郭との間の切岸付近は表土から地山まで10cmもなく、Ⅳ郭との切岸にむけて上を積み重ね、Ⅱ郭としての平坦地とⅣ郭との間の切岸を形成したことが確認できる。また、地山上からは旧表土が確認できることからも、土層を重ねる時には

地山の表土を剥いで土を重ねやすいように整形し、その上で削り出したり運び込んだりした土を突き重ねたと考えられる。Ⅳ郭についても同様で、Ⅳ郭との間の切岸付近は表土から地山まで20~30cm程度で、Ⅵ郭との切岸にむけて土を重ね、Ⅳ郭としての平坦地とⅥ郭との間の切岸を形成したことが確認できる。Ⅶ郭についても同様で、Ⅶ郭との間の切岸付近は表土から地山まで20~30cm程度で、Ⅵ郭との切岸に近づくにつれて土層を重ね、Ⅳ郭としての平坦地とⅥ郭との間の切岸を形成したことが確認できる。郭の形成について共通して観察できるのは、おそらく山の斜面を稜線垂直で断面し字形に削り出し、削り出した土を稜線の前方に押し出して平坦面と切岸を形作る手法で、その際、地山の表土を剥ぎ取り、若干の階段状の加

工を施したのち、上を積み重ねて切岸が崩れにくくしている。Ⅱ郭の削り出し部分は現在の表土から地山まで10cm以内で、また、平坦面はほぼ水平であることから、郭としての加工のち耕作などはほとんど行われなかったようだが、Ⅳ郭、VI郭、VII郭は耕作土と考えられる上層の存在や緩やかな傾斜面、後述のVI郭での遺物の出土状況から、後に耕作地として利用された痕跡を残している。

#### Cトレンチ（図5）

II郭→V郭→VI郭にかけて設定したトレンチで、長さ15.4mである。このトレンチの土層からもII郭はIV郭との間に上層を重ね、II郭としての平坦地と切岸を形成したことが確認できる。また、地山上からは旧表土が確認できることからも、土層を重ねる時には地山を整形し、その上で削り出したり運び込んだりした土を突き重ねたと考えられる。

V郭およびVI郭も削り出しの部分は地山まで10～20cm程度で、VI郭との切岸に向けて土を重ね、IV郭としての平坦地と切岸を形成したことが確認できる。CトレンチからはII郭とV郭との間の切岸の土層の間から須恵器片が検出されている。

#### Dトレンチ（図5）

隨音寺溜池から上野原に向かう小径の鞍部に設定したトレンチで、長さ12.5mである。

#### Eトレンチ（図5）

上野原遺跡として設定したグリッドで、長さ15m、幅4mで、土層図は西側壁面である。この土層図からも確認できるようにグリッド南側は現表土から約1mで地山を削って整地しており、北側ではおそらく埋土をおこなって整地面を調えたことが観察できる。また、一部版築状の土層の堆積が認められ、周辺の状況から、湿地に土を埋め、

整地を施した跡とも想定できる。ただし、整地面と地盤下の埋土より、時期を判別する資料が出土しないことから、整地された時代を特定することはできなかった。なお、この整地面上に堆積した土層中からは古墳時代から近世までの遺物が搅乱された状態で出土している。Eトレンチからは青磁、中世の備前焼の破片が出土している。

#### まとめにかえて

散布地である上野原遺跡、能登堀遺跡の発掘調査をおこなった。調査の結果、能登堀遺跡は後世の客土に偶然須恵器片が含まれていたことが判明した。上野原遺跡中の加工段は山城（雲松寺山（猪道山）城と呼ぶ）に関連したものと考えた。雲松寺山（猪道山）城跡は、島根県八束郡宍道町大字宍道にあり、曹洞宗雲松寺が位置する丘陵を中心に形成されており、今回調査した南支郭群のように周囲の丘陵にも派生している。丘陵の周囲には輪之内、輪之内廻、土井などの中世城郭の存在を補強する地名が残る。また、山頂には「成田の松」と呼ばれる松の巨木があり、舟運の目印になったこと、さらには「成田荒神」と呼ばれる塚がかつては存在したことが伝えられている。今回調査した南支郭群も含め、山城としての遺構はあまり明瞭ではないが、出土遺物の中からは中世の青磁、備前焼なども出土しており、地名に併せ中世城郭と居館が存在する可能性は高いと考えられる。



写真1 上野原遺跡遠景



写真2 上野原遺跡遠景



写真3 雲松寺山(猪道山)城南支郭群加工段



写真4 Aトレンチ



写真5 Bトレンチ



写真6 Bトレンチ土層堆積状況(II→IV郭)



写真7 Bトレンチ土層堆積状況（II郭→郭）



写真8 Cトレンチ



写真9 Cトレンチ土層堆積状況（II郭→・郭）



写真10 IV郭表土剥ぎ取り状況（東側より）



写真11 IV郭表土剥ぎ取り状況（西側より）



写真12 Dトレンチ



写真13 Eトレンチ土層堆積状況



写真14 Eトレンチ土層堆積状況



写真15 雲松寺山の丘陵

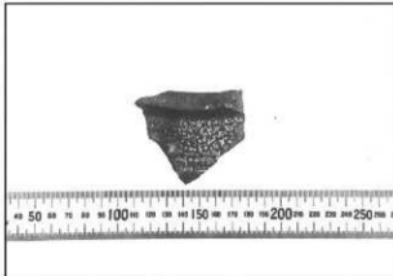


写真16 Eトレンチ出土遺物（備前焼）



写真17 Eトレンチ出土遺物（青磁）

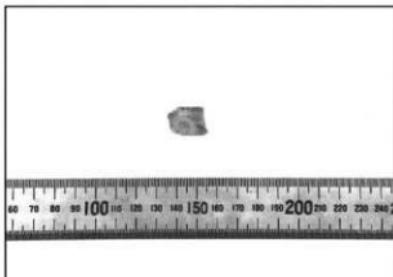


写真18 Eトレンチ出土遺物（青磁）

# 山神谷溜池－木幡山荘隧道について

宍道町教育委員会

## 1.はじめに

国道54号線と国道9号線を結ぶ宍道中央線が計画され、文化財調査をはじめ（本誌 喜松寺山〔猪道山〕城跡南支郭群発掘調査報告参照）各種の調整が図られた。その調整の一つとして喜松寺溜池（宍道町大字宍道字隨音寺）の削平による代替水源確保のために、山神谷溜池（宍道町大字宍道字山神谷）より導水することとなった。

この代替水源確保のための工事は宍道中央線建設工事の一環として事業主体の宍道町（役場建設課）が計画・実施したものである。工事では導水路の一部に山神谷溜池から木幡山荘（宍道町大字宍道字隨音寺）を結ぶ隧道を利用することとなり、詳細な測量がなされ、また地元の方からも建設のいきさつにかかわり関心が払われたことから、現時点で確認できることを紹介する。

## 2. 山神谷溜池－木幡山荘隧道の概要

木幡山荘は宍道町大字宍道279-3番地他に位置する自然庭園で、近世以来、宍道町の旧家木幡家が所有・管理し（現当主木幡修介氏、1986年に八雲本陣記念財團に寄付）、隠居所、または文化活動の場として利用してきた。山神谷溜池－木幡山荘隧道は一般的には「隧道」または「山荘の隧道」などと呼ばれ、山神谷溜池からの用水利用にかかわる者だけではなく、子どもたちの探検心をくすぐる遊び場として地元ではその存在は良く知られている。今回計画された代替水源の導水路は山神谷溜池より木幡山荘に至る隧道をパイプでとおし、山荘内を地下埋設のパイプで導き、喜松寺溜池付近までを結ぶものである。

山神谷溜池－木幡山荘隧道は地元の口伝で「戦時中（第二次世界大戦）に朝鮮人労働者によって掘られたもの」「最初日本人が掘ろうとしたがうまくいかず、朝鮮人労働者によってできた」と伝えられており、山荘内の紅葉谷奥の一段高い平坦面は隧道掘削時の石クズをならしたものと伝えている。十分な聞き取りができていない可能性もあるが、おそらく大変な労力を要しただろうにもかかわらず、隧道掘削に関わる情報は余り多く伝わっていない。地元の方に聞く限りでは、漠然と「戦時下というあわただしい状況の中で情報が外部にあまりつたわらなかった」「朝鮮人労働者＝強制労働者」というイメージで捉えられているようである。

### 【隧道の測量】

隧道は山神谷溜池側から山荘側まで直線距離で約100㍍、幅約2㍍、高さ約1.8㍍を有する。

掘削は山神谷溜池、山荘側の両側から掘り込まれていたようで工具痕からも確認できるし、石クズは両入口付近から確認できる。山荘入口より約50㍍で貫通した上で、その地点はやや幅広であるし、掘削跡の向きがその地点で逆転する。

### 【工具の跡と工具】

隧道内を観察すると数種類の工具痕が確認できる。写真10、11は円柱状の痕であり、円錐形の刺突痕もある。また、残されたノミ（鑿）も見つかっている（写真19）。この隧道掘削には後述のように「火薬」が使用されており、発破作業もあったようだ。

## 3. 山神谷溜池－木幡山荘隧道の関係書類

宍道町役場には山神谷溜池工事関係綴り（宍道

町史料目録 I・宍道町役場所蔵「旧宍道町役場文書」No619 箱28、第2種57)が保存されており、この簿記により隧道掘削工事が昭和16年から始まる「八束郡宍道町大字宍道字山ノ神谷溜池工事」の一環として行われたことが知られる(資料1:請負契約書)。

当初、昭和16年12月1日から昭和18年3月31日までの工期で請負契約が結ばれているが、昭和18年3月30日に「資材並労力不足」により昭和19年3月31日までの工期の延長願いが出されている。請負工事費は三万四千円で、内訳は堤塘費(18,850円)、樋管費(2,350円)、余水吐費(600円)、隧道費(10,400円)、道路費(800円)、雜費(1,000円)からなり、「溜池工事」とはいえ、隧道掘削に多くの経費を充てていることが分かる。年度ごとの決算額は表のとおりで、昭和16年度の工事費九千八百円のうち隧道費には千六百四十円が支出され、「隧道掘鑿」に千六百円をあてていることから、昭和16年末から隧道が掘り始められたことが知られる。

隧道費一万四百円の内訳は資料2に掲げる。このなかで、「隧道掘鑿」の備考欄に「坑夫四人、人夫一、五人、火薬三kg」とあり、ここにある坑夫、人夫として口伝にある朝鮮人労働者があてられた可能性がある。取り水口の図面が残されているが、現存する取り水口はやや形態が異なる。(写真4、5、6)

表1 山神谷溜池工事費(隧道工事費を含む)

単位:円

事業年度	単年度決算額	左單年度決算額の内訳	
		(工事費)	(事務費)
昭和16年度	10,000	9,800	200
昭和17年度	17,200	16,700	500
昭和18年度	7,800	7,500	300
合計	35,000	34,000	1,000

#### 4. まとめにかえて

昭和14年、出雲地方は大旱魃に襲われ、宍道町、来待村も大きな被害を受けた。特に水の枯れた水田や溜池では床割れが発生して貯水ができず、修復のための「床縫」は大変な作業だったという。記録(土江嘉久「六十年來の大旱魃に襲われて」『私たちの昭和(前期)』1992年)によると「四月下旬に雨が降ったのを最後とし、五月六月とも晴天続きの空梅雨で、(中略)七月になっても、相変わらずの旱天で、(中略)田面は白く乾いて大きくなりひび割れ、小さい子どもの足ならはいるようになっていた。(中略)ところによって村雨程度の雨は降ったが、本格的な降雨は九月下旬(十七日頃)になってからであった。」とある。戦時色の益々濃くなる時勢の中で食糧増産のための水利の安定的な確保は危急の課題であったのだろう。このような状況の中で、昭和16年12月1日より「山神谷溜池工事」は始まる。太平洋戦争が勃発するわずか一週間前のことである。

「山神谷溜池工事」の目的は当時の状況と工事費内訳を見る限り、食料生産の安定化(増産)のための①山神谷溜池の貯水量拡大②隧道掘削による隨音寺谷(菟古館周辺)方面への用水確保だった。隧道掘削は昭和16年末か、17年初めには開始され、昭和17、18年に貫通している。書類を見る限りは伝えられるような「朝鮮人労働者によって掘られた」「最初日本人が掘ろうとしたがうまく

(工事費)のうち隧道費額	備考
1,610	内訳の主なものは隧道掘鑿、全103.5mのうち27.0m
不明	
不明	
10,400	内容明細は資料

## 資料1 山神谷溜池、隧道工事請負契約書

八東郡穴道町大字穴道山ノ神  
一、溜池工事

此請負工費 参萬四千圓也

工事竣工期限 昭和拾六年拾貳月老日

本契約書ニ於テハ便宜上起業者タル穴道町長福原二郎ヲ甲トシ工事請負人木幡理吉ヲ乙と称し前記契約要領ノ外相互ノ

権利義務ヲ約定スルコト左ノ如シ

第一条 工事の範囲別設計書及び仕様書圖面三換り乙に於テ之ヲ完成スルモノトス其施行方法並ニ従ヒ誠実完全ニ施行ス

ベシ但工事監督員ト称スルハ島根県乃至は甲ヨリ派出スル監督員ヲ云フ 前項ノ圖面ハ本町役場備置ノモノヲ承

認シ此契約書ニ添付ヲ省略ス

第二条 工事用材料及ビ施工後完全ニ検査シ難キ基礎其他ノ工事ハ豫メ工事監督員ノ検査ヲ経ルニアラザレバ施工スルコト

ヲ得ス其検査費シアルモノハ何回ニテモ乙ノ費用ヲ以テ更換又ハ改造スルモノトス

第三条 工事施工ニ要る各種工具並ビ工事施工中若クハ工事後ノ取引附要スル作業並ニ其費用ハ織テ乙ノ負担トス

第四条 天災其他不可抗力ニヨリ契約期間内ニ達成スルコト能ハサルトキハ甲ノ認定ニ依リ相当ノ延期ヲ与フルコトアルベシ

第五条 請負工事費支払ハ工事完了検査合格シタル上之ヲ支払フモノトス

第六条 工事請負者ハ当町内地元農民ニ優先シテ労セシムルモノトス

右契約ス

昭和拾六年拾老月貳拾九日

八東郡穴道町 福原二郎

穴道町長

八東郡穴道町大字穴道一四二七番地

木幡理吉

八東郡穴道町大字穴道

木幡萬次郎

八東郡穴道町大字穴道

木幡萬次郎

保証人

\* 請負者木幡理吉氏は昭和一七年三月三一日付けで請負の解約届を出し、代わりに昭和一七年三月三一日付けで保証人であつた栗原市氏が同様の契約内容で工事を請け負っている。

## 資料2 潟池工事明細書、隧道工事別紙明細書

## 澗池工事費明細書

一金 參万四千圓也

名 称	材 料	長	高成ハ厚又 ハ本口径	横又ハ幅	員 数	単 位	単 価	金 額 円	適 用
堤 塗 ヒ								18,850	別紙明細書ノ通り
種 管 ヒ								2,350	◆
余 水 吐 ヒ								600	◆
隧 道 ヒ								10,400	◆
道 路 ヒ								800	◆
雜 ヒ								1,000	堤塗水替ヒツ含ム
計								34,000	

## 澗池工事費のうち、隧道工事費明細書

一金 一万四百圓也

水路新設延長 127.5米  
内隧道長 103.5米  
底幅 15米

名 称	材 料	長	高成ハ厚又 ハ本口径	横又ハ幅	員 数	単 位	単 価	金 額 円	適 用
水 路 切 取	軟岩				237.58	粒	7.20	1,710	57
隧 道 掘 鋸	硬岩	103.50	2.76		285.66	◆	21.48	6,135	97
坑門上ノ切取	軟岩				39.68	◆	7.20	285	69
水 路 梁	玉石、コンクリート				23.41	◆	18.91	442	68
水 路 底	一三六コンクリート				1.80	◆	20.34	36	61
取水口隔壁	一二四全				2.93	◆	24.82	72	72
階 段 床 捨	軟岩				39.93	◆	7.20	287	49
階 段 付	玉石、コンクリート				25.64	◆	18.91	484	85
水 路 底 基礎	栗石				4.82	◆	4.00	19	28
堅 椅	ヒューム管				2.00	本	20.00	40	0
全 柱	松材				9.00	ヶ	0.50	4	50
全基部及巻立	一三六コンクリート				1.55	粒	20.34	31	52
型 柄	損料				122.50	特	1.20	147	0
排 水 ヒ	一式				40.00	H	10.00	400	0
用 地 ヒ					0.102	反		9	0
雜 ヒ								292	12
計								10,400	

\*原本は墨書き、数字は漢数字。

圖 1 山神谷溝池—木樨山莊附近周邊地計測圖

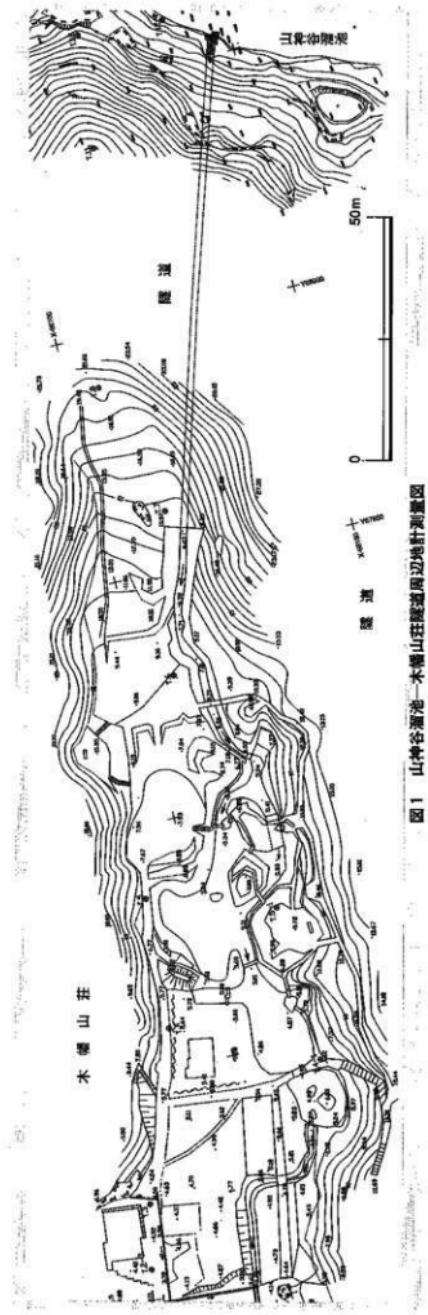




写真1 山神谷溜池満水時（取水口あたり）



写真2 山神谷溜池満水時（取水口上）



写真3 山神谷溜池水抜き後  
(取水口あたり、隧道掘削時の石屑が堆積する)



写真4 山神谷溜池取水口（改修工事前）



写真5 山神谷溜池取水口（改修工事後）



写真6 山神谷溜池取水口（隧道口）



写真7 隧道内（中央部から取水口に向かって）



写真8 隧道内

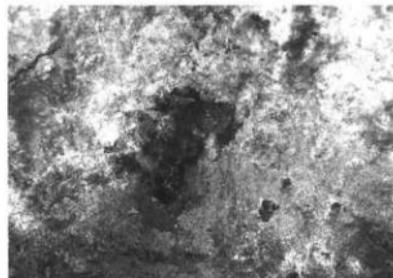


写真9 隧道内に残された採掘工具

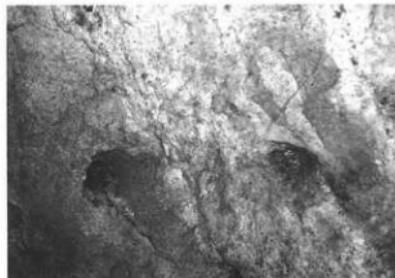


写真10 隧道内に残された採掘工具の掘削痕

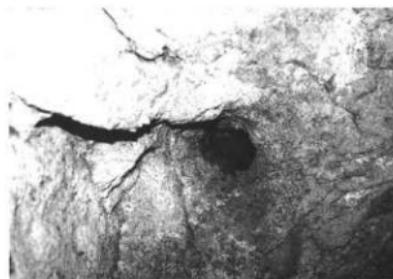


写真11 隧道内に残された採掘工具の掘削痕



写真12 隧道入口（木幡山莊側）

宍道町歴史叢書8

2003年3月31日発行

編集 宍道町教育委員会

発行 宍道町・宍道町教育委員会  
八束郡宍道町大字昭和1番地

印刷 柏木印刷株式会社  
松江市国屋町452-2

---

# Historical Library of Shinji Town 8

---

March, 2003

About Tessai (Iron Dregs) Unearthed in Shinji Town	
Restoration Lessons Using Ancient Tatara (Purification of Steel) Techniques	… (1)
About the Remnants of Ancient Sanindo in Shinji Town's Shinji District	… (27)
From Place Name Arrangement - a Residence and a Mountain Castle in the Vicinity of the Mouth of the Sasou River	… (35)
Stone Products of Iwayajitemple in shinji	… (41)
Unshoujiyama (Shishijiyama) -Castle Excavation Investigation Report	… (45)
About Yamanokandan Reservoir - Kowata Sansou Tunnel	… (58)

Shinji Board of Education

Showa, Shinji-cho, Yatsuka-gun, Shimane-pre, Japan